

2-4. 中野区

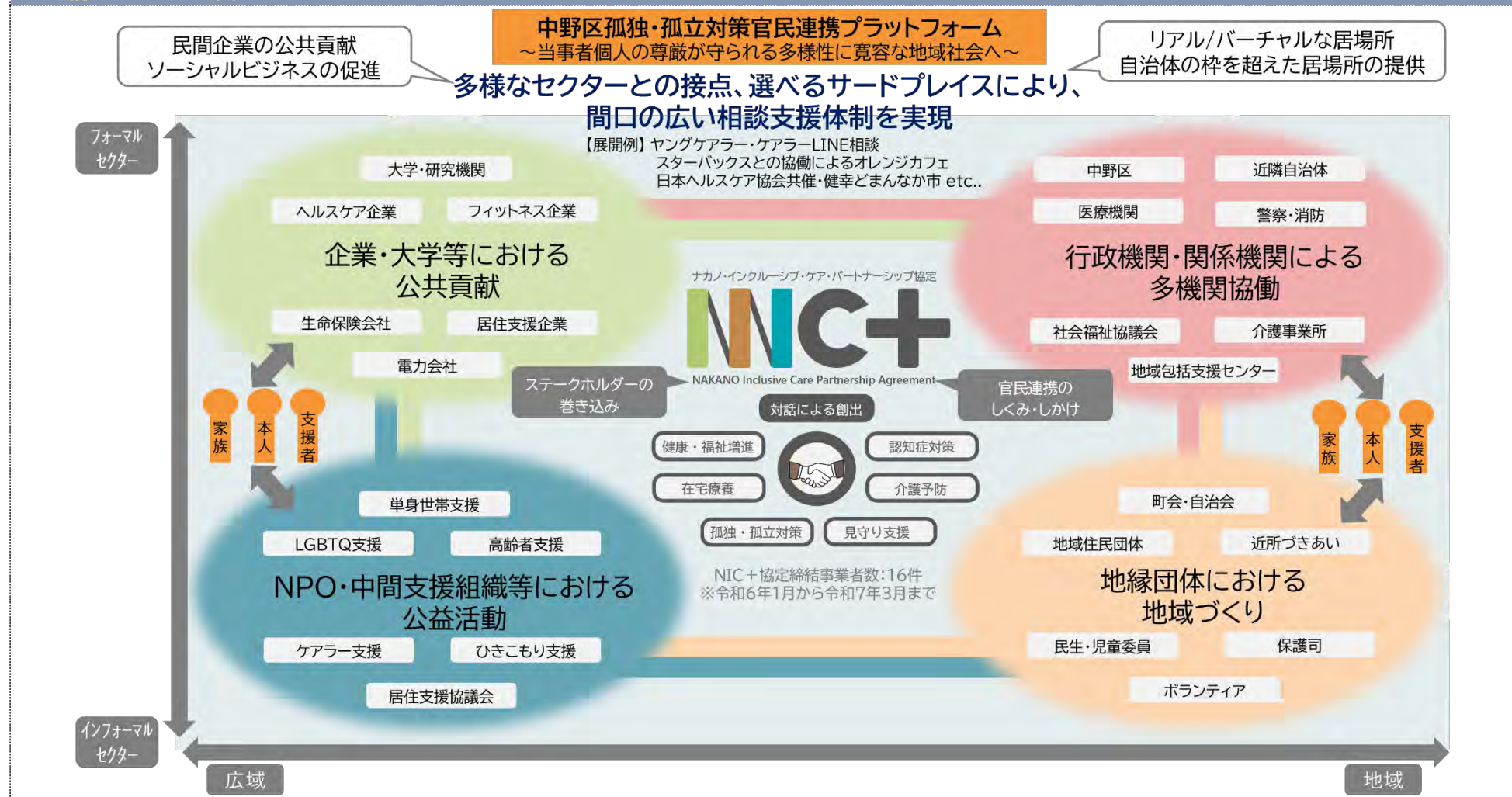
No.	4	中野区
-----	---	-----

1. 取組の全体像					
1. 自治体の概要					
①	自治体名	中野区		②	担当部局名
					地域支えあい推進部 (地域活動推進課、地域包括ケア推進課、介護保険課からなる横断的組織体系)
③	人口	344,880(人)＜令和2年10月/国勢調査＞			
④	自治体内連携	庁内連携部局(メイン)		地域支えあい推進部 地域包括ケア推進課	
			庁内連携内 ※会議体、情報共有	・地域包括ケアシステムにおける地域ケア会議に孤独・孤立対策部会を設置し、既存のネットワークの拡大と孤独・孤立の課題共有を行う。地域包括ケアという名前だが、扱う領域は高齢者や介護に限らない	
		庁内連携部局(メンバー)		孤独・孤立対策関係課	
			庁内連携内容 ※会議体、情報共有	多機関協働事業など重層的支援体制整備事業による庁内連携を軸に、NPO や民間企業等による孤独・孤立支援チャンネルの拡大、情報共有、施策立案、社会実装に向けた検討など行う	
2. 形成をめざす地方版連携 PF の姿					
①	従前の取組 ※重層の取組、外部組織連携、地域コミュニティ形成等	- 重層的支援体制整備事業として、既存の会議体等を活かしながら、包括的相談支援のための基盤づくり、ひきこもり等への参加支援、地域づくり支援を展開 - 地域の課題について話し合い、解決に向けた行動につなげていくための推進組織として、地域ケア会議を設置 - 中野区における地域包括ケア体制の充実を図ることを目的として、中野区地域包括ケア推進パートナーシップ協定(NIC+協定)制度を導入し、官民連携による取り組みを推進			
②	実現したい状態 ※構築する仕組み/支援対象の住民を取り巻く環境	今年度のゴール		- 孤独・孤立フォーラム開催による機運醸成 - 動画配信による情報発信 - 近隣区との連携による支援の拡大(試行)	
		最終的なゴール		当事者個人の尊厳が守られる、多様性に寛容な地域社会に向け、行政機関や地域団体、教育研究機関、民間企業等のネットワークを構築し、連携・協働による啓発活動や支援方策の社会実装をめざす	

3. 地方版連携 PF における連携体制			
①	地方版連携 PF (種類があれば)	立ち上げ年度	令和8年度(予定)
		参画メンバー	様々な分野の民間企業、NPO 法人、社団法人、社会福祉協議会、地域団体、大学、孤独・孤立対策関係課 令和7年度までは孤独・孤立対策部会として運用
		選出・打診時の工夫	孤独・孤立対策部会のメンバーに加えて、NIC + 協定事業者を増やし、福祉以外の分野の企業・団体を巻き込んでいく
②	地域協議会 ※特に専門性の高い支援を行う団体等で構成	立ち上げ年度	令和8年度(予定)
		参画メンバー	重層的支援体制整備事業の枠組を活用した展開を検討
		選出・打診時の工夫	孤独・孤立対策部会で検討
4. PF 連携による価値や工夫_考え方			
・ 情報共有→孤独・孤立に関する課題や当事者について、様々な参画メンバーで共に議論し、孤独・孤立対策の現状や提供できる支援策について情報を共有する ・ 有機的な連携の促進→参画メンバー間での交流を促進することで、支援団体間での連携が強化され、より多くの支援が必要な人へ、様々な分野からの支援策を提供できるネットワークを構築する ・ 孤独・孤立対策をテーマにしたイベントの実施→PF 参画団体が参加する区民向けイベントによって、孤独・孤立に関する情報を発信し、意識の醸成を図るほか、支援体制について周知する			

2. 連携 PF イメージ

5. 連携PFのイメージ図



3. 試行的事業一覧					
6. 本年度に取り組む試行的事業の概要					
試行的事業のポイント・工夫		- PF 参画団体の取り組みを区民に周知する - 孤独・孤立に関する区民の意識醸成を図る			
	事業名称	事業内容	目的/期待効果・KPI	実施時期	発注先
①	孤独・孤立フォーラムの開催	【業務内容】孤独・孤立フォーラムを開催した 【対象】メインターゲット:若者 / サブターゲット:支援団体 【形式】対面 【次第】 - 開会挨拶 - 基調講演 - パネルディスカッション - 閉会挨拶	- 孤独・孤立対策 PF 設置の周知 - 孤独・孤立対策 PF に参画する支援団体等の掘り起こし及び巻き込み - 孤独・孤立に関する区民の意識醸成	11月ー:準備 2月:実施	株式会社 Omniheal (200万円)
			成果検証結果	✓ フォーラム参加者数:151名 ✓ フォーラムへの満足度:非常に満足・満足91% ✓ 孤独・孤立の課題についての理解度: ✓ 非常に深まった・深まった95% ✓ 連携 PF への参画意向:関心がある23件	
②	動画制作	【業務内容】ヤングケアラー支援アニメーションを制作した 【タイトル】「きかせてほしい きみのこと」 【あらすじ】幼馴染のケンタの様子が気になるゆうま。ケンタの状況を聞き、ヤングケアラーを知る。 【時間】約4分	- ヤングケアラーの認知度向上 - ヤングケアラー支援事業の周知 - 声を上げてもいい、助けを求めてもいいと思える社会の意識醸成、個人の行動変容	10月ー:準備・制作 4月ー:公開(予定)	株式会社 MAPPA (200万円)
			成果検証結果	✓ アニメーションは区の公式 Youtube で公開を予定しており、中野区に限らず、全国に向けてヤングケアラー支援の啓発につながるものである。 ✓ アニメ制作会社の SNS も活用し、ティザーを打つことで、注目度を高めた。(X 表示数約5万)	
7. 次年度以降に向けた事業等の案 ※PDCA サイクルに照らして次年度以降に取り組んでいく事業イメージ(あれば)を					
- 第9期中野区地域包括ケア推進会議孤独・孤立対策部会における孤独・孤立官民連携PF、地域協議会の設置検討 - ヤングケアラー支援アニメーションのプロモーションを兼ねた普及啓発の取り組み(パネル企画展の開催等)					
8. 孤独・孤立対策を公表した際の反響					
- 関係機関より連携の必要性について声が上がった - 高齢者だけではなく、若者に対する支援の必要性についても課題認識があった					

4. 連携 PF の行程および実務上の留意点

【PF 立ち上げまでの行程】 ※令和6年度から孤独・孤立対策を実施

R5 年度	(ア)初期段階	
4月～	主担当部署の設定	■広域連携が特徴の地域支えあい推進部が、孤独・孤立対策を担当
9月～	担当者の初動	■例年開催していたシンポジウムで、孤独・孤立対策に関するデータを調べて講演を行った
R6 年度	(イ)準備段階	
	地域の現状把握	■孤独・孤立についての調査や、試行的事業のテーマに関わる実態調査行う
4月～	連携 PF の企画・設計	■マンネリ化していた地域包括ケア推進会議に、民間企業などのオブザーバー参加を得て、孤独・孤立対策部会を設置した
6月～	取組テーマ決定	■PF では幅広い世代を対象としながらも、まだ注目されていない世代として、特に若者の孤独・孤立に着目した ■ヤングケアラーに関する実態調査をもとに、ヤングケアラー当事者の周囲にいる子どもたちを対象とした啓発を行うことを決める
6月～	関係団体のリストアップ(庁外)	■庁内の既存のネットワークから、孤独・孤立対策に関連する組織とつながった
9月～	関係団体のリストアップ(庁内)	■既存のつながりからの派生や、中野区からの能動的な声掛けなど、様々なきっかけと通じて、民間企業との協定を結んでいる
	(ウ)設立段階	
2月～	域内住民・団体への情報発信	■中野区を拠点とするアニメ制作会社と協力し、ヤングケアラー当事者の周囲の子供たちに向けた、啓発アニメを制作 ■孤独・孤立対策に関する若者の活動を紹介するフォーラムを開催した
今後	連携 PF の運営	■地域包括ケア推進会議の孤独・孤立対策部会をもとにしながら、NIC+協定などを通じて拡大を図る
	(エ)自走段階	
今後	地域協議会の設置	■地域ケア会議等、既存の会議体との関係を整理しながら検討を進める
今後	PF の拡大・活性化	■NIC+協定でつながった民間企業には、民間企業側からの協力提案を受けただけでなく、中野区側からも協力してほしいことを提案していく

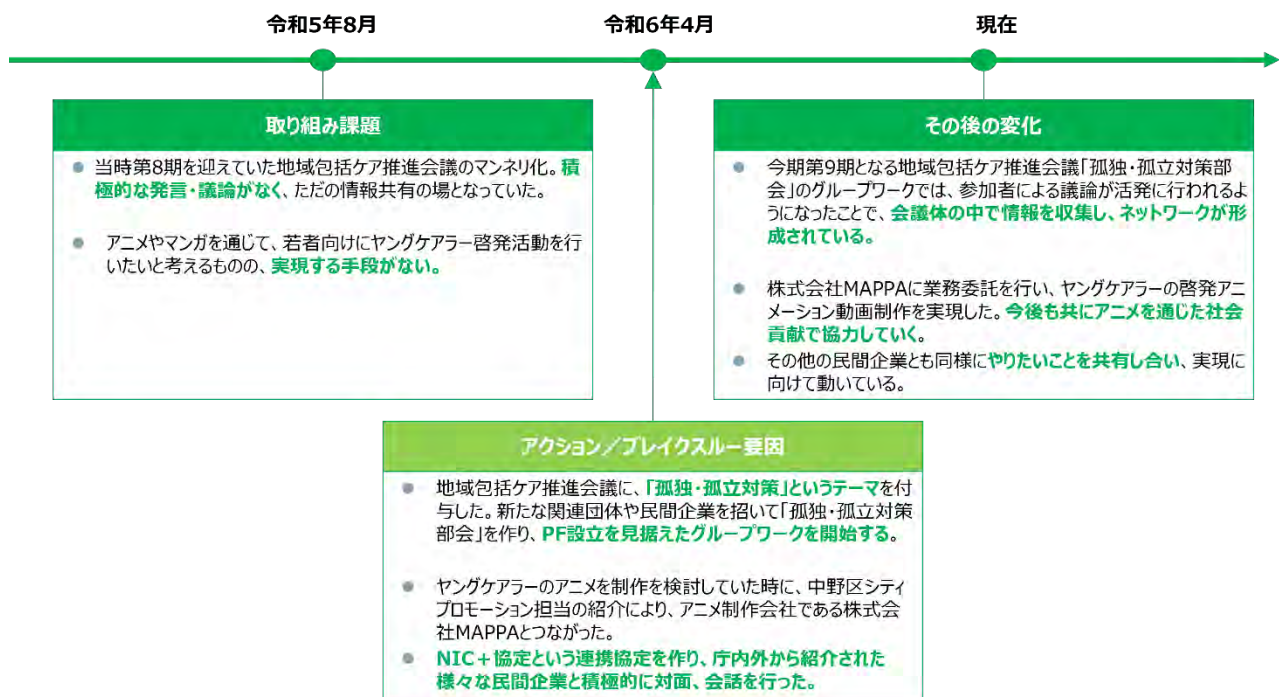
【それぞれの段階での留意】

(ア)初期段階		
①	主担当部署の設定	■<u>広域連携が特徴の地域支えあい推進部が、孤独・孤立対策を担当</u> 孤独・孤立対策という様々な分野を巻き込む必要性のある取り組みには、横断的組織体系である地域支えあい推進部が適任であるとされた。地域支えあい推進部の中でも、広域活動を担当し、NPO 法人との関わりあった地域包括ケア推進課であれば、今までの活動を生かせるだろうという期待があった。
②	担当者の初動	■<u>例年開催していたシンポジウムで、孤独・孤立対策に関するデータを調べて講演を行った</u> 例年開催していた中野区地域包括ケアシンポジウムの令和5年のテーマを「孤独・孤立対策を考える」に設定した。地域支えあい推進部長が孤独・孤立に関するデータを集めて講演を行い、地域包括ケア推進課長は支援者から当事者になった時に視点の変化が起こったという自身の経験に基づくプレゼンをした。
(イ)準備段階		
③	地域の現状把握	■<u>孤独・孤立についての調査や、試行的事業のテーマに関わる実態調査を行う</u> - 令和2年度「暮らしの状況と意識に関する調査」で孤独・孤立に関する調査を実施した。 - 令和5年度小学4年生から高校生世代を対象に「ヤングケアラー実態調査」を行った。
④-1	取組テーマ決定	■<u>PF では幅広い世代を対象としながらも、まだ注目されていない世代として、特に若者の孤独・孤立に着目した</u> - PF は幅広い世代を対象としながらも、まだ注目されていない世代として、特に若者の孤独・孤立に着目した。小中学生、就職氷河期世代、高齢者の孤独はそれぞれ注目されているのに対し、20-30 代の孤独・孤立は、対策の制度がないと考えた。 ■<u>ヤングケアラーに関する実態調査をもとに、ヤングケアラー当事者の周囲にいる子どもたちを対象とした啓発を行うことを決める</u> - ヤングケアラーに関する既存の取り組みは、こども家庭庁を中心になされているものの、コーディネーター配置など支援者支援に偏っているという意識があった。ヤングケアラーに関する実態調査を行った際に、自由記述欄に子どもたちの意見が多く寄せられたことから、子どもたちが自分で考え、自分の意見を持っていることに気が付いた。そこで、当事者の周囲にいる子どもたちに、ヤングケアラーの存在を伝えるという形の当事者支援を行うことを決めた。
④-2	連携 PF の企画・設計	■<u>マンネリ化していた地域包括ケア推進会議に、民間企業などのオブザーバー参加を得て、孤独・孤立対策部会を設置した</u> 地域包括ケア推進会議のマンネリ化を受けて孤独・孤立というテーマ性のある部会を設置した。NIC+協定事業者のオブザーバー参加を得ながら、孤独・孤立対策 PF 設置を見据えてグループワーク形式をとった。
⑤	関係団体のリストアップ 初期メンバーへの声掛け	■<u>庁内の既存のネットワークから、孤独・孤立対策に関連する組織とつながった</u> - 中野区長や庁内の他部署を通じて、孤独・孤立対策に関連する企業や、地域包括ケア推進課が取り組みたいことが実現できそうな企業とつながっている。 - ヤングケアラーのアニメーション制作を検討していた時に、取り組みたいことが実現できそうな企業とつながっている中野区シティプロモーション担当の紹介により、アニメ制作会社である株式会社 MAPPA とつながった。
		■<u>既存のつながりからの派生や、中野区からの能動的な声掛けなど、様々なきっかけを通じて、民間企業との協定を結んでいる</u> - もともと中野区とのつながりがある大学教授からの紹介を受けたり、中野区が参加したセミナーの参加企業への声掛けをするといった能動的な活動をしたり、様々なきっかけを通じて、新たな民間企業とつながっている。 - 企業からの提案を受ける際は、必ず対面でお互いのやりたいことについて話し合い、マッチングするかを確かめている。

(ウ)設立段階		
⑥	域内住民・団体への 情報発信	■<u>中野区を拠点とするアニメ制作会社と協力し、ヤングケアラー当事者の周囲の子供たちに向けた、啓発アニメを制作</u> ・ 中野区シティプロモーション担当からの紹介で、中野区に拠点を移したばかりの株式会社 MAPPA とつながることができた。予算の問題があり、アニメ制作実現が難しく思われたときもあったが、株式会社 MAPPA が街の一員として地域に貢献したいと考えていたことや、ヤングケアラー支援の取り組み内容に共感を得たことにより、実現することができた。 ・ ヤングケアラーは、家庭の問題であるため、周囲の人が干渉しづらい。どのように本人やその家族に気づきを与え、必要な人たちとつながれるようにするのかを考えながらの制作となった。 ・ アニメ制作が完了した後は、中野区内の小学校・中学校での視聴、中野区 YouTube チャンネルでの公開を行う。株式会社 MAPPA 及び株式会社 コントロール公式 SNS での宣伝、中野区内でのアニメの制作工程の展示による宣伝を通じて、ヤングケアラーに接点のない子どもたちにも、関心を向けてもらえるようにする。 ■<u>孤独・孤立対策に関する若者の活動を紹介するフォーラムを開催した</u> ・ フォーラムでは、テーマである「若者の孤独」を前面に押し出すのではなく、若い世代の支援者を多く巻き込んだパネルディスカッションを設計した。支援の対象は若者、女性、高齢者など様々だが、若者が取り組む孤独・孤立対策の活動を知ってもらう場になった。
⑦	連携 PF の運営	■<u>地域包括ケア推進会議の孤独・孤立対策部会をもとにしながら、NIC+協定などを通じて拡大を図る</u> ・ 来年度以降に連携 PF を設置する。地域包括ケア推進会議の孤独・孤立対策部会をもとにしながら、NIC+協定などを通じて拡大を図る。まずは中野区が中心となって運営していく想定である。
⑧	地域協議会の設置	■<u>地域ケア会議等、既存の会議体との関係を整理しながら検討を進める</u>

(エ)自走段階		
⑨	PF の拡大・活性化	■<u>NIC+協定でつながった民間企業には、民間企業側からの協力提案を受けただけでなく、中野区側からも協力してほしいことを提案していく</u> ・ 官民連携に向けたしくみである NIC+（ナカノ・インクルーシブ・ケア・パートナーシップ）協定を通じて、福祉に限られない幅広い領域の団体や民間企業を、孤独・孤立対策 PF に巻き込んでいく。 ・ NIC+協定では、民間企業と協定を結ぶことをゴールとせず、民間企業からも中野区からも一緒に取り組めることを提案しあって、具体的な動きを作り続けることを大切にしていく。

ブレイクスルー要因	
アクション/ ブレイクスルー要因	■官民連携のための仕組みを作り、官民双方からやりたいこと・できることを共有し合えるように、積極的に対話を行っている - もともと若者向けにヤングケアラー啓発活動を行いたいと考えるものの、実現する手段がないという状況に対し、紹介を通じてアニメ制作会社とつながったことで、ヤングケアラーの啓発アニメーション動画制作を実現した。制作のみに留まらず、今後も共にアニメを通じた社会貢献で協力していくための準備を行っている。 - NIC+協定という連携協定制度を作り、庁内外から紹介された様々な民間企業と積極的に対面、会話をしていることで、その他の民間企業とも同様にやりたいことを共有し合い、実現に向けて動いている。



コラム ～地域の支援団体から見た孤独・孤立対策と連携 PF の重要性～

株式会社 MAPPA / 株式会社 コントレール

- 株式会社 MAPPA
 - ・ 令和3年に設立し、テレビアニメを中心に、映画、CM、Web ムービー等、ジャンルにとらわれない様々な映像作品の企画・制作を行う。また、自社で権利を保有する IP の窓口権を運用し、国内外でのライセンス事業も展開する。
- 株式会社 コントレール
 - ・ 令和元年9月に MAPPA のグループ会社として設立。片渕監督の『この世界の片隅に』、『この世界の(さらにいくつもの)片隅に』の制作をきっかけに、共通の考え方、共通の技術基盤を共有するスタッフたちを作り出すスタジオとして設けられた。

💡 中野区の取り組みを通じて、アニメーションの力で社会に貢献したい

- 株式会社 MAPPA
 - ・ 令和6年10月に東京本社を中野区へ移転し、街の一員として地域に貢献していきたいと考えていたところ、中野区からヤングケアラーを題材にしたアニメーション制作のお話をいただいた。取り組み内容に共感したため、本作品を制作させていただくこととなった。
 - ・ 当社も中野区の取り組みを通して社会課題への学びを続けていき、アニメーションを通じて社会に貢献していきたい。
- 株式会社 コントレール
 - ・ ヤングケアラーを題材にしたアニメーション制作する事で、私達“作り手側”にも得るものが大きかった。制作過程で支援者や当事者の方への取材の機会を沢山いただき、映像を通じて課題に向き合う姿勢や何を伝えるべきかを深く考える機会になった。アニメーションの絵作りとは別に映像を作る意義を再認識出来るととても良い経験になった。



本作品を通して中野区が取り組んでいる
「孤独・孤立対策」の一助になれば幸いです

株式会社 MAPPA 代表取締役社長
株式会社コントレール 代表取締役
大塚 学

コラム ～地域の支援団体から見た孤独・孤立対策と連携 PF の重要性～

特定非営利活動法人文楽舎みんなのよりば

- ・ 代表の林誠氏が、子どもたちのサードプレイスとして平成 25 年から自宅を開放して文楽舎を開設。子どもの学校と家庭の往復からはみ出した、寄り道できる「寄り場」であると同時に、心の拠り所になる「拠り場」である居場所づくりを行っている。令和6年から NPO 法人化し、子どもの頃文楽舎で育った青年たちと共に、孤独・孤立な子どもたちへの継続的支援が可能な体制づくりに取り組んでいる。
- ・ 文楽舎では、訪ねてくる子どもたちに対し、「何もしない」ことを行っている。大人が持っている社会の価値観を子どもたちに押し付けることなく、ただ子どもたちが本来持っている力を信じ、子どもたちのそばにすることで、「子育て」ではなく、「子育て」を待つ。
- ・ 子どもたちは、文楽舎で、提供される食事を食べたり、庭にある倉庫を秘密基地にしたりと、自由に過ごすことができる。林誠氏は、必要があれば保護者の代わりに学校の進路相談に出向いたり、大学進学のための保証人になったりといった「里親」の役割も果たしている。

💡 孤独・孤立対策 PF に求めるのは、専門機関同士をつなぐネットワークになること

- ・ 不登校やいじめなどの専門的な支援組織やその知識は非常に大切であるものの、その枠組みをすり抜けてしまう子どもたちを受け止める場所が必要である。子どもたちが抱える問題は、名前のある問題1つによって成り立っているのではなく、名前のない問題が複雑に絡み合っ構成されている。例えば、「お父さんの話し方がなんとなく怖い」という気持ちを抱える子どもを、DVやネグレクトの専門機関で救うことが難しい。
- ・ また、子どもの問題は、多くの場合、家族の問題ともつながっている。例えば、不登校になった子どもがいるとき、その子どもを学校に行かせなければと焦るお母さんにも、サポートが必要である。この時、子どもの支援組織とお母さんの支援組織がつながっていなければ、適切なサポートを行うことは困難である。
- ・ 縦に専門性を磨く機関が横に広がることは難しいため、専門機関同士をつないでいく別の存在が必要である。連携 PF には、そのネットワークになる役割を果たしてほしい。学校、家庭、行政、各支援機関がつながっていることで、名前のない問題への対応や、家族全体への包括的なサポートが可能になる。

💡 地域に住む個人の巻き込み、支援団体の認知拡大も、孤独・孤立対策 PF の機能として期待している

- ・ 民生委員のような具体的な活動を行っていない高齢者の方にも、困っている子どもたちを気かけ、助けたいという思いを持っている方はたくさんいる。組織で固めてしまうと責任が生じ、動き取りづらいこともあるため、思いのある個人を巻き込んだゆるいつながりが生まれると、取り組みの幅が広がっていくのではないかな。
- ・ 支援団体としての活動を通じて感じる地域の実態、課題や、それを解決するために行っている取り組みについて、地域に発信していくことが大切だと思っているものの、どこに向けて発信すればいいのかわからない状態である。PF には、それぞれの支援団体が持っている思いを語り合う場を作ったり、その声を地域に向けて発信したりする役割を担ってほしい。



子どもたちが孤独で、心が孤立している状態とは、安心して過ごせる環境や信頼してつながれる人との関係が、見失われてしまっていることだと考えます。まず倒れている子どもに気づき、そっと寄り添うこと。助けてと声をあげられる環境を用意し、何かをしてあげるのではなく、子ども自身が行動しようとするまで、伴走者としてそばにいます。それを大切にしています。

特定非営利活動法人文楽舎みんなのよりば
代表理事 林 誠

コラム ～地域の支援団体から見た孤独・孤立対策と連携 PF の重要性～

認定 NPO 法人 CLACK

- ・ CLACK は、平成30年から「生まれ育った環境に関係なく、子どもが希望とワクワクを持てる社会。」をビジョンに掲げ、デジタル教育とキャリア教育の事業を通じて、中高生の進路の選択肢を広げ、経済的自立と精神的自立を促している。
- ・ 英和7年 2 月に中野区鷺宮で中高生のクリエイティブハブ「テクリエさぎのみや」をオープン。ソフト面だけではなくハード面からも中高生に対する支援を行うため、中高生ならだれでも無料で自由に利用できる空間を提供している。1F ではワッフル屋を運営して中高生以外の層との接点を持ち、中高生の保護者などにも取り組みについて知ってもらう工夫を行っている。

💡 **中野区での活動を始めたばかりの CLACK では、地域からの信頼を得ることを重視している。中野区と NIC+協定を結び、連携 PF の一員となることで、地域に根差した居場所となることを目指す**

- ・ 中高生には、学校以外の実体のある居場所が少ない。学校になじめない子どもたちがつながりを求めて行きつくのが SNS になるが、ゲームなどを通して知り合った顔の見えない相手とは、恋愛問題や闇バイト、オーバードーズのようなトラブルに発展する危険性がある。そのため、「テクリエさぎのみや」の利用を通じて、中高生が学校以外に同世代同士でつながるきっかけや、顔の見える大人と知り合うきっかけを得られるようにしている。
- ・ 中高生にとって信頼できる大人のいる場所であることと同様に重視しているのが、中高生の保護者や学校など、地域全体にとっても信頼して中高生を預けられる場所になることだ。CLACKは大阪市から始まった団体であり、中野区での活動を始めてまだ日が浅い。そこで、地域での信頼が得られるよう、地域の学校に出向き、校長や現場の教員たちに活動について理解が得られるよう、対話を行っている。しかし、「テクリエさぎのみや」周辺の人々と顔見知りになる中で、更に一歩外にネットワークを広げることの難しさを感じ、そのきっかけとして中野区との協力を選んだ。
- ・ CLACK は令和6年9月から中野区との間で中野区地域包括ケア推進パートナーシップ(NIC+)協定を締結した。今後中野区で構築される孤独・孤立対策 PF のネットワークや取り組みを通じて、中野区で活動する様々な支援団体などと実際に顔を合わせ、鷺宮エリア以外の団体や人々ともつながりを持つために、積極的な活動を行っていく。



中高生に対し、デジタル等を活用した多様な体験や機会の提供を通じて、継続した学習支援や人との繋がりにより孤独・孤立の状態となることの予防・解消をめざしています。

連携 PF の一員となり、より一層中野区と連携・協力することで地域一体となった包括的な支援を行ってまいります。

認定 NPO 法人 CLACK

5.自治体等との打合せ記録一覧				
No.	日時	打合せ相手団体	出席者	
			打合せ相手	NRI
1	8/22(木) 11:00-12:30	中野区役所 地域支えあい推進部	石井様、河村様、 赤峰様、塚西様、金子様	生駒、谷本、加藤
2	9/10(火) 14:30-16:00	中野区役所 地域支えあい推進部	石井様、河村様、 赤峰様、塚西様、金子様	谷本、加藤
3	10/2(水) 15:00-16:30	中野区役所 地域支えあい推進部	石井様、河村様、 赤峰様、塚西様、金子様	生駒、谷本、加藤
		株式会社 Omniheal	熊谷様	
4	10/16(水) 11:00-12:00	中野区役所 地域支えあい推進部	石井様、河村様、 赤峰様、塚西様、金子様	生駒、谷本、加藤
		中野区役所 区民部	高橋様、伊藤様	
		株式会社 MAPPA	廣瀬様、橋本様	
		株式会社 コントレール	北澤様、関根様	
5	11/7(木) 11:00-12:00	中野区役所 地域支えあい推進部	石井様、河村様、 赤峰様、塚西様、金子様	生駒、谷本、陳
6	11/28(月) 16:00-17:00	中野区役所 地域支えあい推進部	石井様、河村様、 赤峰様、塚西様、金子様	生駒、谷本、陳
7	12/25(水) 13:00-14:00	中野区役所 地域支えあい推進部	石井様、河村様、 赤峰様、塚西様、金子様	生駒、谷本、陳
8	1/31(金) 16:00-17:00	中野区役所 地域支えあい推進部	石井様、河村様、 赤峰様、塚西様、金子様	生駒、谷本、陳
9	2/27(木) 13:00-14:00	中野区役所 地域支えあい推進部	石井様、河村様、 赤峰様、塚西様、金子様	谷本、陳

6. 自治体による従前からの取組

■ 地域包括ケア体制

(取組概要)

中野区では、高齢者の方が可能な限り住み慣れた中野区で尊厳を保って最後まで生活することができるよう、平成29年に「中野区地域包括ケアシステム推進プラン」を策定し、地域包括ケアシステムの構築を推進するために行政と区内の関係団体が一体となって様々な取り組みを進めてきた。しかしながら、個人や家庭が抱える課題は複雑かつ複合化しており、これまでどおりの相談体制・制度では解決が難しくなっていることを受け、令和5年からこれまで主に高齢者を対象として進めてきた地域包括ケア体制をさらに発展・充実させ、支援が必要なすべての人を対象にした体制の構築を目指し、「中野区地域包括ケア総合アクションプラン」策定した。

7. 試行的事業	
① 孤独・孤立フォーラムの開催	
概要	- 名称:孤独・孤立フォーラム～孤独・孤立の接点～ - 日程:令和7年2月22日(土)10:00～16:30 - 開場:中野区役所 1 階イベントスペース「ナカノバ」
ねらい	- 孤独・孤立対策 PF 設置の周知 - 孤独・孤立対策 PF に参画する支援団体等の掘り起こし及び巻き込み - 孤独・孤立に関する区民の意識醸成
工夫点	- ポスター88枚・チラシ1421枚の配布、中野区やフォーラム登壇者などの HP・SNS 等を通じた積極的な宣伝を行った。 - 孤独・孤立対策に取り組む民間企業によるロボットや VR デバイスの体験会を行い、参加者の孤独・孤立への理解を促した。
結果	- フォーラム参加者数:151名 - 午前の部:28名 - 午後の部:事前申し込み83名、当日申し込み30名

プログラム概要

- 常設展示: オリィ研究所による分身ロボット『OriHime』の体験会
支援活動団体 8 団体によるパネル展示
- 午前の部: 大塚製薬による VR デバイス『FACE DUO』の体験会
中野区で孤独・孤立支援を行う団体の交流の場
- 午後の部: 開会のあいさつ(中野区長)
基調講演(株式会社オリィ研究所所長)
パネリストによる支援活動紹介とパネルディスカッション

◆ FACE DUOの体験会



◆ 午後の部の基調講演で壇上に立つ『OriHime』



◆ パネル展示



◆ 午後の部の会場の様子



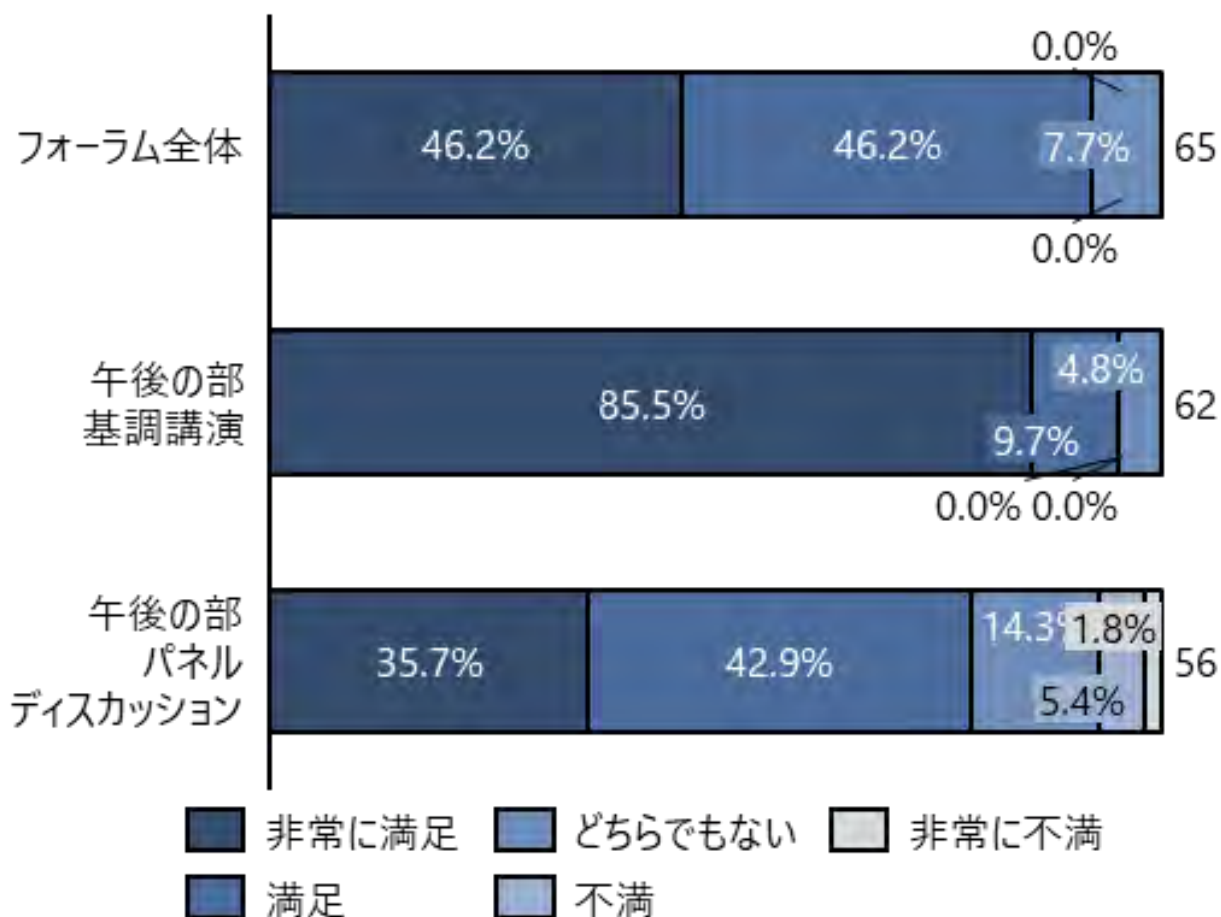
アンケート結果

- アンケート回答数:66件
- 孤独・孤立の課題についての理解:非常に深まった 27 件(41%)、
深まった 36 件(55%)
- 連携 PF への参画への関心:関心がある 23 件(任意回答)
- アンケート項目:フォーラム全体及びプログラムごとの満足度、フォーラムをきっかけに新たな連携・協力が生まれる可能性、フォーラム全体を通じて得た学び など

フォーラムを通じて得た学び・行動への影響(自由記述)

- 孤独・孤立の問題について理解が深まった
- 地域や団体との連携の重要性を感じた
- 自身の活動(地域のサードプレイスづくりなど)に活かしたい
- 高校・中等教育との連携の可能性を考えたい
- クラウドファンディングなどを活用して支援の幅を広げたい

◆ フォーラムの満足度



② 動画作成	
概要	- 名称:ヤングケアラー支援動画の制作 - 公開日:令和7年4月頃
ねらい	- ヤングケアラーの認知度向上 - ヤングケアラー支援事業の周知 - 声を上げてもいい、助けを求めてもいいと思える社会の意識醸成、個人の行動変容
工夫点	- アニメ制作を広報に取り入れることで、視覚的に魅力があり、感情に訴える効果的なコミュニケーションを可能とした。 - 見て終わりではなく、「見て考える」きっかけになるよう制作した
結果	- アニメーションは区の公式 Youtube で公開を予定しており、中野区に限らず、全国に向けてヤングケアラー支援の啓発につながるものである - アニメ制作会社の SNS も活用し、ティザーを打つことで、注目度を高めた(X 表示数約 5 万)

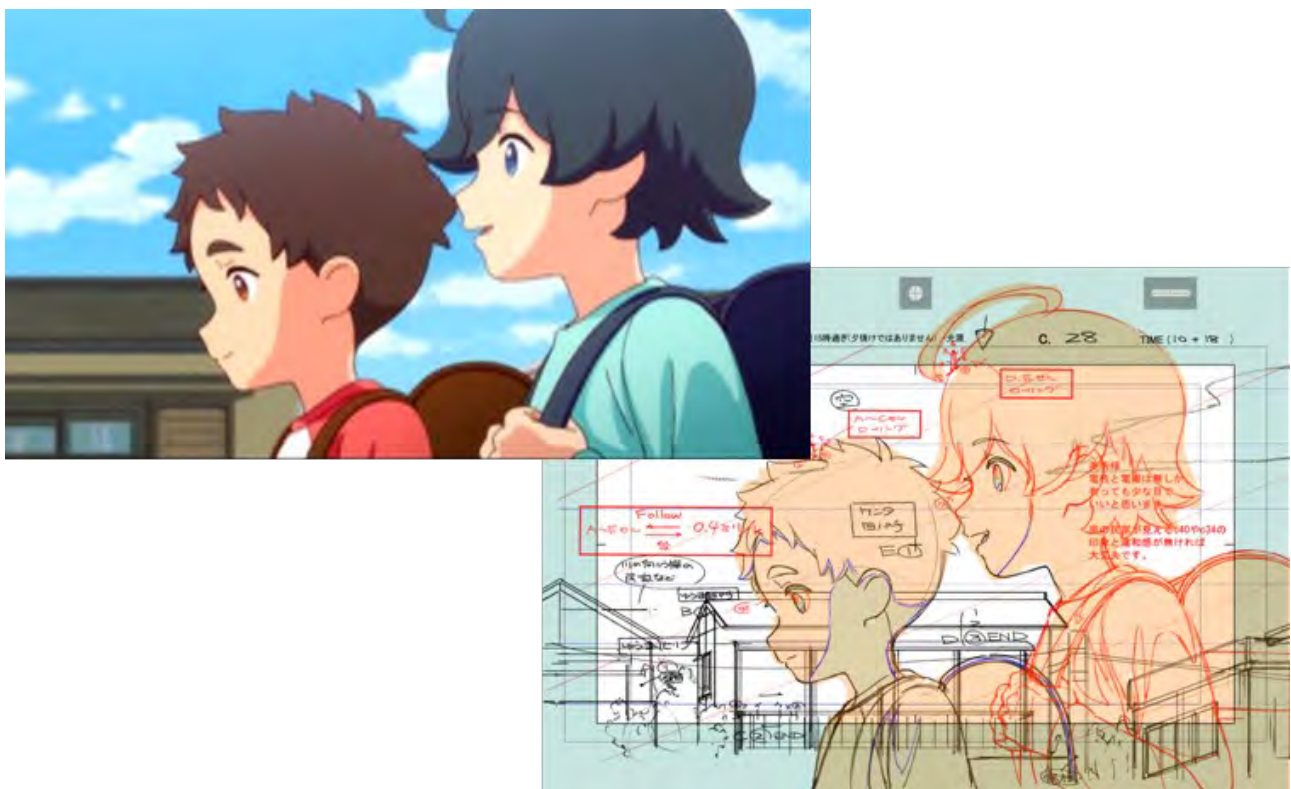
アニメの概要

◆ タイトル

「きかせてほしい きみのこと」

◆ あらすじ

幼馴染のケンタの様子が気になるゆうま。ケンタの状況を聞き、ヤングケアラーを知る。



ヒアリングの実施

支援者が支援したい気持ちが純粹で、そういった人がたくさんいる。

孤独・孤立を感じる人が一歩自分の力で踏み出してもらえるよう、また、踏み出すことを待っている人がいるということを伝えることができる内容とした。

- 中学生・高校生

対象：ハイティーン会議(※)参加者の中学生、高校生

「各学校に相談室はあるが、実際にはかなり入りづらい雰囲気がある」「相談してもなにも変わらないと思う」「悩んでいる友人がいたら助けたい」という中高生のリアルな意見を聞くことができた。

※ハイティーン会議・・・中野区に在住・在学・在勤の中学生・高校生年代が、学校や学年の枠を超えて、意見交換やフィールドワークを通して考えを深め、中高生ならではの意見表明につなげていく事業

- 支援関係者

対象：子どもの居場所支援者、ヤングケアラーコーディネーター

「現実には本人から相談があることはあまりないが、アニメーションを見て希望を見せたい。ポジティブな内容がよい」とアドバイスを受けた。

- ヤングケアラー担当者

対象：祖母の介護を経験した2名に話を聞いた。

「当時は自身がヤングケアラーということを知られたくない訳ではなく、相談するようなことと思わなかった」

2-5. 座間市

No.	5	座間市				
1. 取組の全体像						
1. 自治体の概要						
①	自治体名	座間市、綾瀬市、大和市、海老名市		②	担当部局名	座間市 地域福祉課、 綾瀬市 福祉総務課 大和市 健康福祉総務課、 海老名市 生活支援課
③	人口	約 60 万(人)				
④	自治体内 連携	庁内連携部局(メイン)		各市支援体制により異なる。 ※座間市の例 地域福祉課		
			庁内連携内 ※会議体、情報共有	・各市支援体制により異なる。 ※座間市の例 「包括的支援体制推進委員会」 座間市政策会議規程(に基づき、個別の政策課題等)に 対応するために設置		
		庁内連携部局(メンバー)		各市支援体制により異なる。 ※座間市の例 庁内 29 課(「包括的支援体制推進委員会」)		
			庁内連携内容 ※会議体、情報共有	・各市支援体制により異なる。 ※座間市の例 「包括的支援体制推進委員会ワーキンググル ープ」 包括的支援体制推進委員会の下に設置。全ての市 民が生きることを持ち、市民が抱える複合 的で多様な課題を連携して解決するため、包括的 な相談支援体制構築を図る上で具体的な検討を 行う		
2. 形成をめざす地方版連携 PF の姿						
①	従前の 取組 ※重層の取 組、外部 組織連 携、地域 コミュニ ティ形成 等	・【座間市】生活困窮を柱に包括的な相談支援体制の構築を目指し、福祉領域でのス テークホルダーを開拓、委託先や庁外支援団体などで構成される「支援調整会議」 を月 1 回実施し、支援団体との連携、検討を継続して実施している ・【綾瀬市】コロナ禍における市民団体等との協働によるフードパントリー事業、就労 準備支援事業「はたらつく・あやせ」と協働の拠点型のひきこもりサポート事業、相談 窓口を訪れることが困難な方を対象としたアウトリーチ支援事業 ・【大和市】こもりびと支援窓口の設置による、当事者や家族の相談支援、社会福祉 協議会と連携した社会参加機会の創出 ・【海老名市】アウトリーチ支援専門員のアウトソーシングと委託先による連携機関 の開拓、包括連携協定を結ぶ企業とのひきこもり等支援に係る事業連携について の打診				
②	実現したい 状態 ※構築する 仕組み/ 支援対象 の住民を 取り巻く 環境	今年度のゴール		・ 広域的に連携できる社会資源等の発掘及び リスト作成 ・ 孤独・孤立支援に対する市民への意識付け ・ 担当者レベルの連携会議結成		
		最終的なゴール		・ 市域にとらわれない事業者との連携強化、地域 全体での相談・支援体制の構築及び活用 (地域資源マップの作成含む)		

3. 地方版連携 PF における連携体制

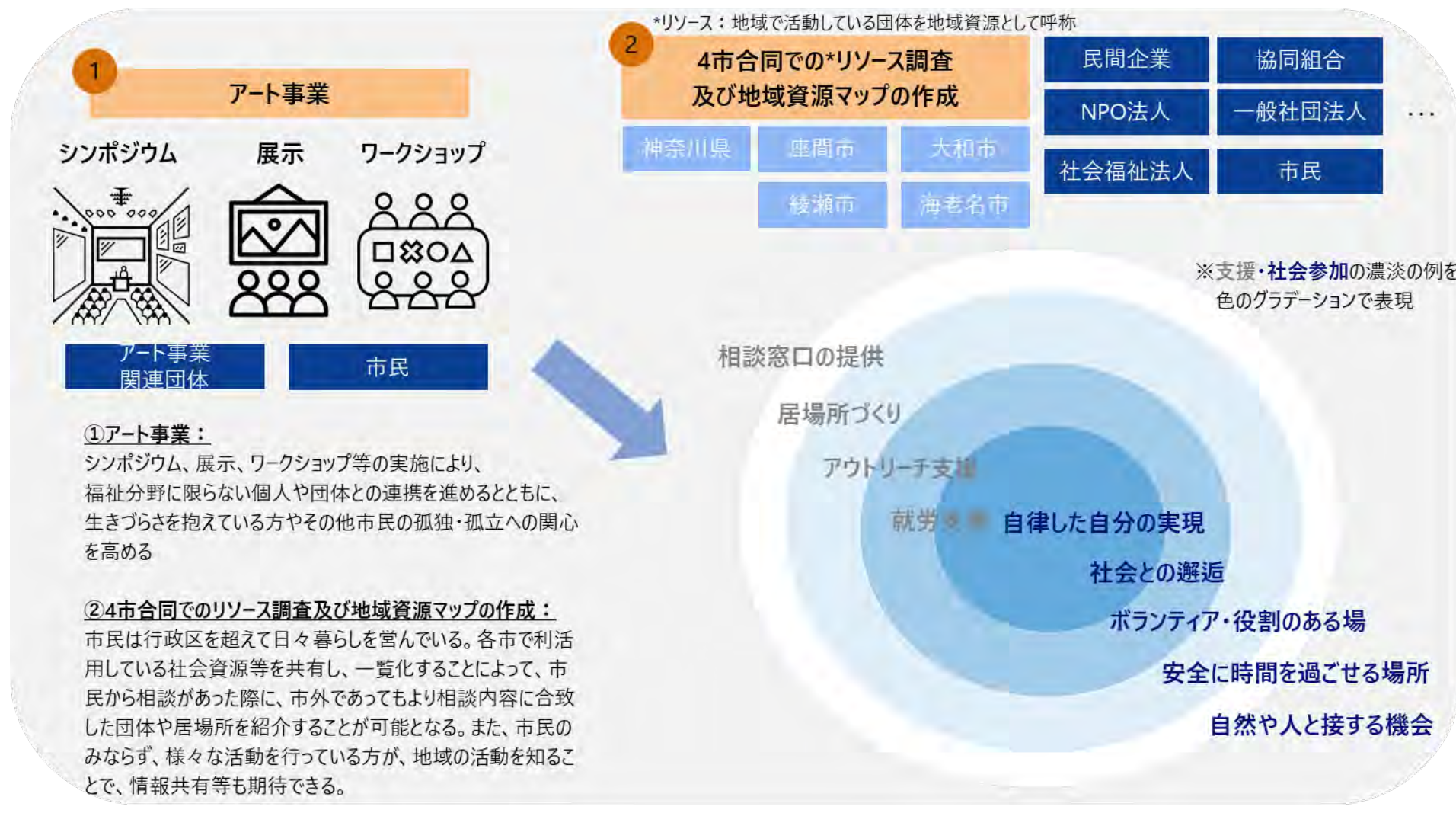
③	地方版連携 PF (種類があれば)	立ち上げ年度	未
		参画メンバー	4 市がこれまでの取組の中でつながっている団体 + α
		選出・打診時の工夫	※今回の PF 形成で候補団体に出会う可能性
④	地域協議会 ※特に専門性の高い支援を行う団体等で構成	立ち上げ年度	未
		参画メンバー	各市支援体制により異なる。
		選出・打診時の工夫	※今回の PF 形成で候補団体に出会う可能性

4. PF 連携による価値や工夫_考え方

- ・ 昨年度、座間市の試行的事業を2つ実施した。「アートによる社会参加の創出」では、これまで福祉や孤独・孤立に関心のなかった住民に対して、孤独・孤立問題やその対策に興味をもってもらえた等の点でアートの力を活用することに効果を感じた。
- ・ 「啓発のための学習会」では、地域で活動する団体は行政単位(市域)で活動しているわけではないことが知見として得られた。
- ・ 日々の暮らしを起点に考えれば、生活者(民側)は市域の枠を常に意識して暮らしているわけではないので、孤独・孤立対策の視点からは生活圏を意識した取組も必要であると考え、行政(官側)は自団体以外の民間団体について情報すら持っていないことが多い。本事業により 4 市の連携強化と広域の官民連携 PF 形成を図ることで、より生活者の暮らしの有り様に合わせた支援が可能となる。
- ・ 広く孤独・孤立問題を周知することで、民間団体、地域住民等も社会参加のきっかけや伴走者になりうることを啓発し、「地域全体での相談支援体制」の構築を目指す。

2. 連携 PF イメージ

5. 連携PFのイメージ図



3. 試行的事業一覧					
6. 本年度に取り組む試行的事業の概要					
試行的事業のポイント・工夫		・ アートを軸とした4市協働での普及啓発活動・当事者を対象とした WS の開催 ・ 4市で活用できる地域資源マップの作成及び共有			
	事業名称	事業内容	目的/期待効果・KPI	実施時期	発注先
③	アート事業	・ 【座間市】市役所という市民生活を意識する場所で、孤独・孤立の問題を個人として考える機会をつくるための美術展 ・ 【綾瀬市】当事者を参加対象として、アートの力で自分の存在を肯定できる時間をつくる WS ・ 【大和市】行政・福祉・アートの各領域における孤独・孤立への知見を共有し、市民参加を促すシンポジウムを開催した。 ・ 【海老名市】孤独・孤立という社会課題を一般大衆に広く啓蒙することを目的とした街中展示	・ 孤独・孤立を感じている方が自分の生きづらさを肯定的に捉えられるようになる。 ・ 孤独・孤立を感じている方に対して寛容な環境をつくる。 ・ 就労による自己実現だけでなく、生きづらさを抱える人の中にある個性や魅力が発見・評価される地域づくり。	令和6年11月～ 令和7年3月	株式会社 Little Barrel (770万円)
			成果検証結果 ✓ 展示会来場者:3,198 名 ✓ WS 参加者:約 60 名 ✓ シンポジウム参加者:126 名 ※各アンケート結果は次ページ以降で掲載		
④	リソース調査・地域資源マップの作成	・ 【調査対象及び調査対象者数】 ・ 4 市内で活動する NPO 法人、社会福祉法人、こども食堂、地域包括支援センター等 157 件(メール・郵送・手渡し・FAX 等)に配布、63 件回収 ・ 【調査事項】 ・ 活動内容、人とのつながりや孤独・孤立に関連する取組の有無、PF への参画意向、団体紹介等 ・ 【調査方法】 ・ まず 4 市へ聞き取り(保有するリストや社会資源の確認)を行い、孤独・孤立対策(就労や居場所等)となりえる民間団体のリスト化を実施 ・ アンケートは、メール・郵送・手渡し・FAX 等でリスト内の団体へ配布	・ 4 市内の孤独・孤立 PF に関連する取組を実施する団体の把握、官民連携 PF に参画意向のある団体等の発掘 ・ 調査先からの更なるつながり先の紹介により把握していない社会資源の発掘	令和6年12月～ 令和7年2月	一般社団法人 市民連帯経済 つながるかながわ (29.9万円)
			成果検証結果 ✓ 活動内容、支援形態の把握 ✓ 地域資源マップの作成 ✓ 孤独・孤立(人とのつながり)問題に取り組むアイデアの収集		

7. 次年度以降に向けた事業等の案 ※PDCA サイクルに照らして次年度以降に取り組んでいく事業イメージ(あれば)を列举
・ 4 市連携による「地域でつながる官民の支援体制」の構築・持続的な活動基盤の形成 ・ 就労による自己実現だけでなく、生きづらさの中にある魅力を発見・評価できる体制の整備 ・ 地域住民が市域にとらわれず支援につながる環境の整備

8. 孤独・孤立対策を公表した際の反響

- ・ 表現者と支援される/する人が立場を超え、ユニークな時間と場を共創した本プロジェクト。高齢化や単身世帯増加が進むいま、どんな人も孤独や孤立の問題と無縁ではない。それを先駆ける、先進性と示唆に満ちた企画だった。(地域創造レター 3月25日号より抜粋)
- ・ 孤独孤立に対して、寄り添うこと、待つこと、などの重要性を体感できる企画だった。不確かさを含む時間的、心理的な余裕が必要だと感じられた。(関係者コメント)

4. 連携 PF の行程および実務上の留意点

【PF 立ち上げまでの行程】

実務上の留意点				
連携 PF の 行程	過年度	令和5年度:PF の基本的な 考え方の検討	今年度	令和6年度:広域連携 PF の 立ち上げの準備
(ア)初期段階				
主担当部署の 設定	R5 年度	■従前からの自治体独自の先進 的な取組・連携枠組みをフル活 用した、連携体制の構築	R6 年度 8月～	■各市のひきこもり相談支援に携 わる部署が担当
担当者の初動		—		■早い段階から 4 市での合同会 議を開催し、認識合わせを実施
(イ)準備段階				
取り組み テーマの設定	R5 年度	■あえて特定の対象に焦点化 せず、支援の網から漏れて しまう人を対象に	R6 年 度 10 月～	■アート事業のコンテンツを各市 の意見を元に決定
地域の 現状把握	R5 年度	■日頃の相談業務の中において 様々な地域・住民ニーズを把握 し、既存の枠組みで対応できな い事柄を把握	R6 年度 11 月 ～	■市域を超えた支援を目指し、地 域資源マップの作成を目的にリ ソース調査を実施
関係団体の リストアップ (庁外)	R5 年度	■支援団体との意見交換を通じ て、行政の発想にとらわれな い PF 参画団体を検討	R6 年度 11 月 ～	■過年度からのつながりがある団 体やリソース調査の回答団体か ら声掛け予定
関係団体の リストアップ (庁内)	R5 年度	■広く庁内で連携している既存の 枠組みを活用		■担当課以外への普及・啓発、巻 き込みは今後の課題
初期メンバー への声掛け	—	—		—
連携 PF の 企画・設計	R5 年度	■行政と支援団体との対等な関 係での「水平的連携」を目指す	R6 年度 2 月～	■県の事業への参加をきっかけ に、県との連携を開始
(ウ)設立段階				
域内住民・団体 への情報発信	R5 年度	■アートを起点とした情報発信の 実施	R6 年度 12 月 ～	■「アート×福祉」の普及啓発を 様々な形(WS、シンポジウム、 展示)で実現
連携 PF の 運営	—	■団体間での連携強化を目的とし た勉強会の実施	今後	■リソース調査において PF 構築 に前向きな団体へ声掛けしなが ら、県と連携
(エ)自走段階				
地域協議会の 設置	—	—	今後	■広域連携での地域協議会の立 ち上げに関しては事前準備が必 要
PF の 拡大・活性化	—	—	今後	■当事者の生活圏を考慮した連携 ができる PF の構築を目指す

【PF 立ち上げまでの行程】

(ア)初期段階		
①	主担当部署の設定	■各市のひきこもり相談支援に携わる部署が担当 - 座間市では昨年度より地域福祉課が継続的に担当。 - 他 3 市の担当者も、主にひきこもり相談支援に携わる部署で元々連携があり、昨年度のアート事業の展示会にも各市に足を運んでもらったため、声掛けはスムーズであった。
②	担当者の初動	■早い段階から 4 市での合同会議を開催し、認識合わせを実施 他市への声掛けはスムーズだったものの、4 市での意思決定が難しかった。何度か会議を開催して、各市の課題や本事業にて成し遂げたいことについて話し合いを行った。

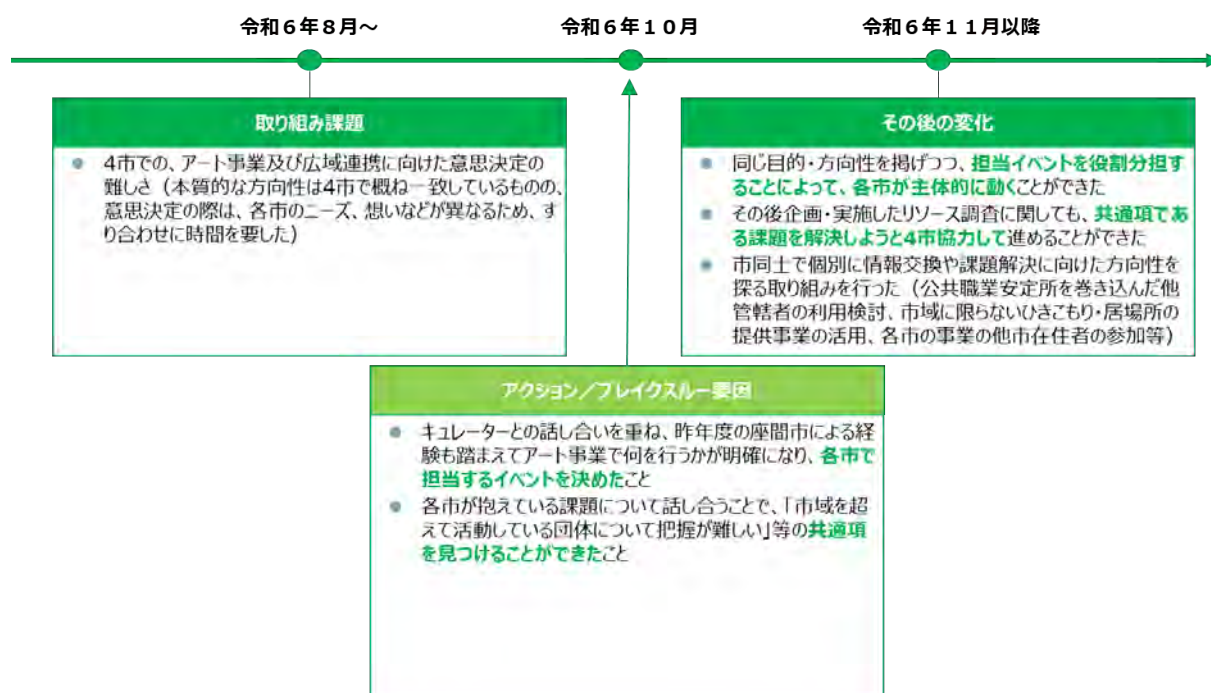
(イ)準備段階		
③	地域の現状把握	■市域を超えた支援を目指し、地域資源マップの作成を目的にリソース調査を実施 - リソース調査を企画・実施。調査設計にあたり、過年度他自治体が行った調査票を参考に作成。 - 配布団体の連絡先は各市から募ることで、把握する団体の幅を広げることができた。また、資源マップの作成にもつながった。
④-1	取組テーマ決定	■アート事業のコンテンツを各市の意見を元に決定 福祉×アートを専門とするキュレーターに相談しながら、WS は支援者、当事者どちらにも有益であること、シンポジウムは昨年度行ったトークイベントの拡大版として、展示は WS の結果を用いて孤独・孤立を社会課題として普及・啓発することをそれぞれ目的にして実施。
④-2	連携 PF の企画・設計	■県の事業への参加をきっかけに、県との連携を開始 4 市連携を基盤に県の事業(つながりサポーター養成講座)に参加。これをきっかけとして県との連携ができ、かながわつながりネットワーク(神奈川県版孤独・孤立対策官民連携 PF)にも座間市として参加しているため、4 市連携のバックアップ協力を県にも依頼したい所存。
⑤	関係団体のリストアップ 初期メンバーへの声掛け	■担当課以外への普及・啓発、巻き込みは今後の課題 企画課には、4 市連携について報告を求められているような状況ではあるが、庁内連携は今後の課題である。
		■過年度からのつながりがある団体やリソース調査の回答団体から声掛け予定 - 昨年度本事業の勉強会に参加された団体が今年度のリソース調査の回答者にもなっており、2 年継続したことによってネットワークが強化された。 - リソース調査の結果を受けて、PF 構築に前向きな団体と組むことを想定している。

(ウ)設立段階		
⑥	域内住民・団体への情報発信	■「アート×福祉」の普及啓発を様々な形(WS、シンポジウム、展示)で実現 様々な手法(WS、シンポジウム、展示)でアート事業を展開したため、市民の目に触れる機会が増えた。また、美術手帖等へも掲載していただいた。支援者にとっては、相談者との関係性など、日頃の相談業務を見直すきっかけにもなった。
⑦	連携 PF の運営	■リソース調査において PF 構築に前向きな団体へ声掛けしながら、県と連携 かながわつながりネットワークのメンバー(神奈川県版孤独・孤立対策官民連携 PF)の会議に座間市も出席しているが、当該メンバーは横浜市・川崎市の団体が多く、ここに本事業で行ったリソース調査にて、PF 構築に前向きな団体を推薦することを考えられる。県からも情報を共有いただきながら進めていきたい。

(エ)自走段階		
⑧	地域協議会の設置	■広域連携での地域協議会の立ち上げに関しては事前準備が必要 生活圏での建付けと、地域協議会の関係(法は市域で完結するという認識)が難しく、広域連携での地域協議会の立ち上げに関しては、別途研究が必要。

⑨	PF の拡大・活性化	■当事者の生活圏を考慮した連携ができる PF の構築を目指す 単発で終わらせるつもりはなく、現場担当者の意見も聞いて今後の取組について設計したい。その際、市で区切るのではなく、生活圏での連携が重要だと考えている。神奈川県は政令市が3市+他市町村という構成であるため、県としてひとまとめに考えづらい。一般市が動くことで県にもよい影響を及ぼすことができるとよいと考える。
---	------------	--

ブレイクスルー要因		
	アクション/ ブレイクスルー要因	■現在抱えている課題や、これから目指そうとしている方向性の共通項の発見・共有 - 昨年度座間市単体で行ったアート事業への視察をきっかけに、他3市にも趣旨をご理解いただいた上で参画いただいたものの、4市でのアート事業の詳細決めや広域連携に向けた方向性のすり合わせに時間を要した。 - その中で、各市で担当するイベントを決めたことや、各市が抱えている課題について話し合う過程において「市域を超えて活動している団体について把握が難しい」等の共通項を見つけることができたことによって、同じ目的・方向性を掲げつつ、担当イベントを役割分担することによって、各市が主体的に動くことができた。 - また、試行的事業以外でも、市同士で個別に情報交換や課題解決に向けた方向性を探る取り組みを行うことができた。



コラム ～地域の支援団体から見た孤独・孤立対策と連携 PF の重要性～

社会福祉法人中心会 ユニバーサル就労支援

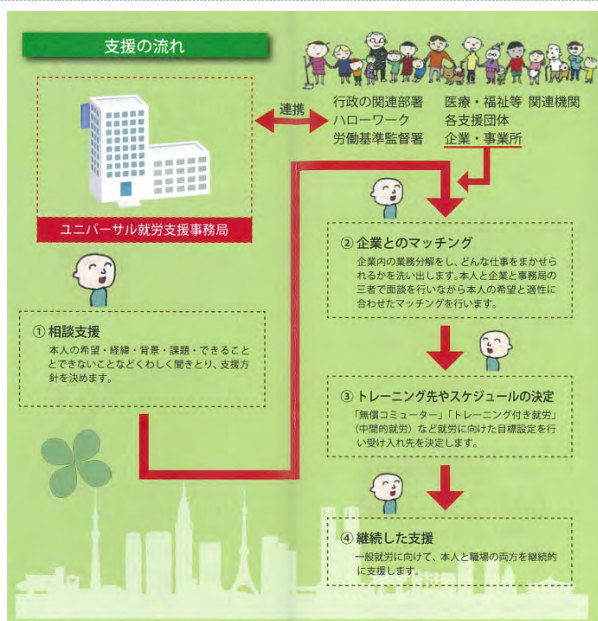
- ・ ユニバーサル就労支援は、「働きたいけれど、働けずにいる人」をサポートする仕組みの構築を目的に、高齢者施設や児童養護施設を運営する社会福祉法人中心会の社会貢献事業として、平成 26 年 4 月より開始。
- ・ 就労ブランクのある方、障がいのグレーゾーンの方、心身に不調のある方など、制度の狭間にいて必要な支援を受けることができていない方に対して、個人の事情や特性に合わせた働き方ができるように、就労希望者のみならず、企業(職場)側もサポートする。具体的には、中心会が運営する高齢者施設や児童養護施設、協力企業等で実習を行い、随時フィードバックを行いながら、就労への準備を行う。
- ・ ユニバーサル就労支援事務局の連携先として、座間市、海老名市、綾瀬市、大和市、厚木市等の市役所や社会福祉協議会、ハローワーク等があり、就労以外の支援が必要な場合にも迅速に連携できるようになっている。

💡 個人情報保護等の観点から、お互い詮索し合わない時代において、8050 問題、家庭内孤立等の問題をいかに発見・リーチするかが課題

- ・ 仕事がないということだけでなく、様々な要因が組み合わさることで、人は孤独・孤立状態に陥る。一見孤独に見えないが、家族と折り合いがつかないで家庭内で孤立している方も存在する。実際は社会に問題があることでも個人の問題と見なされる昨今の風潮の中で、「相談する」という行為は、プライベートな事項を開示することになる。そのため、相談を促すのは容易ではなく、支援する側から発見し、声をかけることが求められる。
- ・ 相談者からの相談経路についても、半数以上が「連携先機関から」であり、「本人から」「家族から」の選択肢より高い割合を占めている。連携先機関に自分から相談に行く人は問題ないが、そうではないひきこもりや孤独・孤立の方にいかにリーチするかが課題である。

💡 支援者側も孤立しないよう、ハブ的な機能を有する PF の構築に期待

- ・ 支援者自身で受け止めきれない内容の相談を受けたとき、支援者側が孤独・孤立に陥る可能性もある。PF には、支援者の相談窓口として、市内のリソースの情報共有や手詰まりな状態に対するアドバイスの提供をしてもらえる機能も持ってほしい。
- ・ 個人で活動されている方もいるため、支援団体含め、地域にどのようなリソースがあるかは知っておくことが重要である。PF 構築にあたり、支援団体や個人で活動する市民について知ることができるツールもしくは機会があるとよい。



周囲からそう見えなくても、実際には孤立し孤独を感じている方が多く、また、支援を受けることに抵抗のある方もいらっしゃるため、「相談してほしい」と言うより「ちょっと来て力を貸してほしい」という声かけが有効だと思います。就労に限らず、実際にその人が力を発揮できる場づくりが必要だと考えます。

社会福祉法人 中心会
ユニバーサル就労支援事務局
伊藤 早苗様

5.自治体等との打合せ記録一覧				
No.	日時	打合せ相手団体	出席者	
			打合せ相手	NRI
1	8/26(月) 10:00-11:30	座間市 地域福祉課	林様、谷田様、吉野様	生駒、谷本、坂田
		綾瀬市 福祉総務課	野口様、木練様	
		大和市 健康福祉総務課	鈴木様、佐伯様	
		海老名市 生活支援課	向原様、永田様	
2	9/13(金) 15:00-16:00	座間市 地域福祉課	林様、谷田様、吉野様	生駒、坂田
		綾瀬市 福祉総務課	野口様、木練様	
		大和市 健康福祉総務課	鈴木様、佐伯様	
		海老名市 生活支援課	向原様、永田様	
3	9/30(月) 15:00-16:00	座間市 地域福祉課	林様、谷田様、吉野様	生駒、坂田
		綾瀬市 福祉総務課	野口様、木練様	
		大和市 健康福祉総務課	鈴木様、佐伯様	
		海老名市 生活支援課	向原様、永田様	
4	10/16(水) 16:00-17:00	座間市 地域福祉課	林様、谷田様、吉野様	坂田
		綾瀬市 福祉総務課	野口様、木練様	
		大和市 健康福祉総務課	鈴木様、佐伯様	
		海老名市 生活支援課	向原様、永田様	
5	12/25(水) 10:00-11:00	座間市 地域福祉課	林様、谷田様、吉野様	生駒、坂田
		綾瀬市 福祉総務課	野口様、木練様	
		大和市 健康福祉総務課	鈴木様、佐伯様	
		海老名市 生活支援課	向原様、永田様	
6	2/20(木) 17:30-18:30	座間市 地域福祉課	林様、谷田様、吉野様	生駒、坂田
		座間市 地域福祉課	林様、谷田様、吉野様	
7	3/4(火) 10:00-11:00	綾瀬市 福祉総務課	野口様、木練様	坂田
		大和市 健康福祉総務課	鈴木様、佐伯様	
		海老名市 生活支援課	向原様、永田様	

※その他、キュレーター、各アーティストとの打ち合わせ多数

6. 自治体による従前からの取組

<座間市>

■ 生活困窮者自立支援制度「断らない相談支援」による支援体制づくり

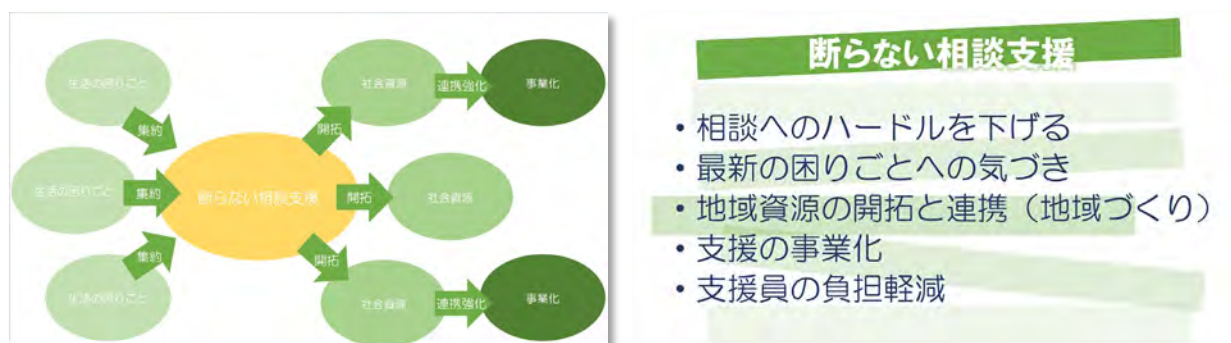
(取組概要)

座間市では、さまざまな問題を抱えて生活に困っている方の課題解決と自立を支援。

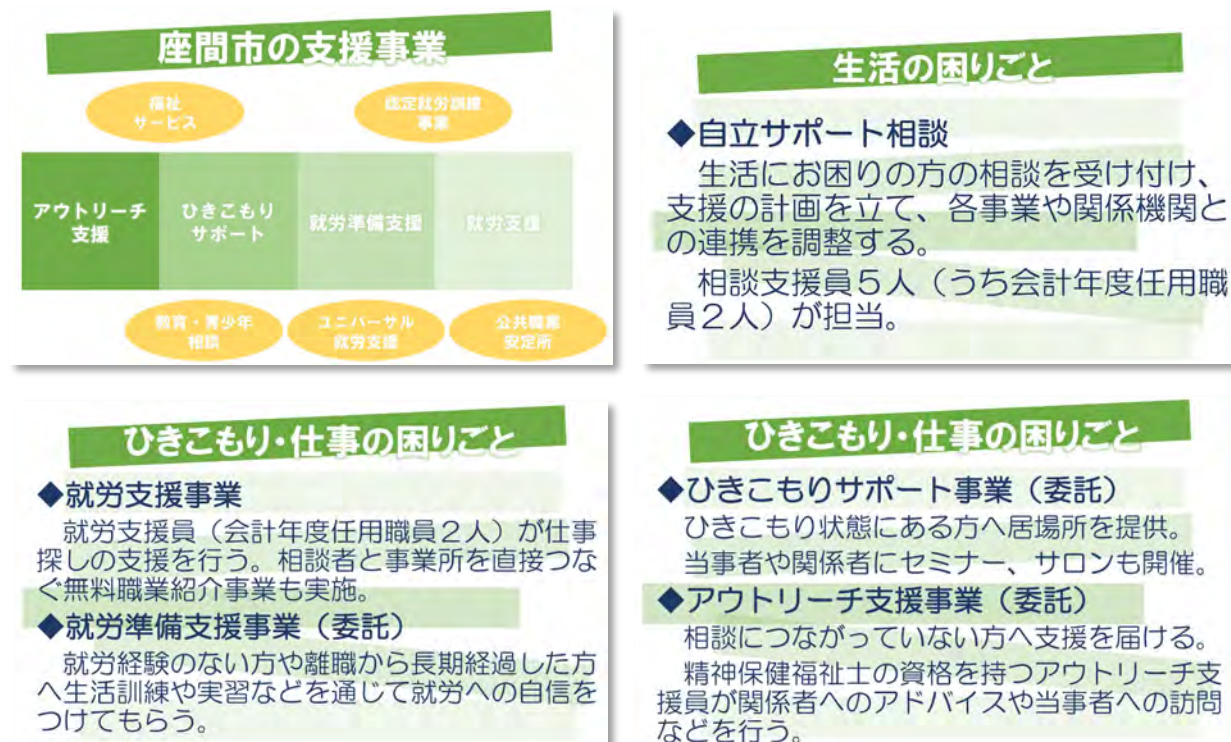
相談支援員は、課題解決のために何が必要か一緒に考え、具体的なプランを作成し、自立に向けた支援を実施。相談は、本人だけでなく、家族や関係者からも受け付けている。

具体的な支援の種類として、自立相談支援、就労支援、就労準備支援、居住支援、住居確保給付金等の支援を実施。

図表 断らない相談支援



図表 座間市の支援事業



■ 包括的支援体制整備WG等を中心とした庁内連携
(取組概要)

「生活の困りごと」の支援を通じた庁内連携体制の構築を検討。庁内ルールや連絡体制など、包括的な支援体制の仕組みを整備。平成29年度に行政改革推進委員会の専門部会として発足し、令和2年度にワーキンググループへ移行した。

「生活困窮者支援」を福祉だけの問題ではなく、市役所へ来る方は困りごとを抱えている可能性があると考え、市役所全体で、市民の困りごとに「気づき」、適切な支援へ「つなぐ」ための仕組みを検討している。

図表 つなぐシート・相談チャート



図表 職員研修



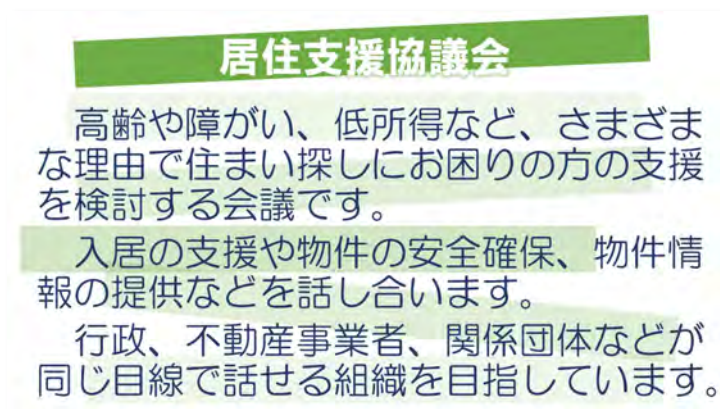
■ 居住支援協議会

(取組概要)

高齢や障がい、低所得など、さまざまな理由で住まい探しにお困りの方の支援を検討する会議。

居住支援協議会は、経済的にお困りの方、高齢の方、障がいのある方、子育て中の方、外国籍の方など、住まい探しにお困りの方および住宅を貸し出している方への情報提供や円滑な入居に必要なことを話し合うことで、豊かで住みやすい地域づくりに貢献することを目的としている。

図表 居住支援協議会



(委託先)

有限会社トータル・ケアサービス(アウトリーチ等の充実による自立相談支援機能強化事業)

生活クラブ生活協同組合(就労準備支援事業・ひきこもりサポート事業)

特定非営利活動法人 ワーカーズ・コレクティブ協会(就労準備支援事業・ひきこもりサポート事業)

さがみ生活クラブ生活協同組合(就労準備支援事業、ひきこもりサポート事業)

特定非営利活動法人ワンエイド(一時生活支援事業、地域居住支援事業)

社会福祉法人 座間市社会福祉協議会(家計改善支援事業、子どもの学習・生活支援事業)

<綾瀬市>

■ ひきこもりサポート事業 みんなの居場所「ぽーこ・あ・ぽーこ」

(取組概要)

綾瀬市では、ひきこもり状態にある方などの状況に応じた社会参加に向けた支援を行っており、その一環としてみんなの居場所「ぽーこ・あ・ぽーこ」を提供している。「今は、引きこもり状態だけど、現状を変えたい」、「誰に相談していいかわからない」、「自宅以外にホッとできるところが欲しい」などの悩みを抱える市民は、安心して過ごせる居場所や相談場所として、土日祝日を除く 9 時半～16 時半で「ぽーこ・あ・ぽーこ」を利用できる。運営は、共同企業体 生活クラブ、NPO 法人ワーカーズ・コレクティブ協会、さがみ生活クラブの 3 者が行っている。

図表 ひきこもりサポート事業 みんなの居場所「ぽーこ・あ・ぽーこ」チラシ

綾瀬市ひきこもりサポート事業
みんなの居場所

ぽーこ・あ・ぽーこ

居場所は安心して過ごせるいつでも気軽に利用できる場所です

誰に相談したらいいかわからない
外に出るきっかけがほしい
自宅以外でホッとできるところがほしい
人とのかわり方に自信がない
まずはひとりでんびりしたい
話をきいてほしい
そんな時は
『みんなの居場所ぽーこ・あ・ぽーこ』へ
～私たちはあなたを応援します～

みんなの居場所ぽーこ・あ・ぽーこ
綾瀬市寺尾中1-8-11カタノビル2F
0467-73-7482
開所日 月曜日～金曜日
9:30～16:30

ひきこもり状態にある方がそれぞれのかたちで社会参加に
向けた支援を目的としています

『ぽーこ・あ・ぽーこ』は音楽記号で
『ゆっくり・だんだんに』という意味があるそうです
私たちもそんな気持ちを大切にしたいと思っています

フリーサロン
何もなくても、自宅以外で
ほっとできる時間に
スタッフと雑談したりお茶を
してみたり
折り紙、ゲーム、漢字練習や
パソコンに触れてみたい
過ごし方は自由に

企画サロン
季節行事や物づくり

あせらず
ゆっくりと…

相談
雑談から相談に…何を
相談したいのかわ
からなくても大丈夫
専門の方につぐこ
ともできます

居場所セミナー
利用者・家族向け
専門家や経験者のお話

『みんなの居場所 ぽーこ・あ・ぽーこ』はフリースペース中心ですが、
ゆるやかに社会参加につながっていくためのメニューもあります

運営団体

★ひきこもりサポート事業を綾瀬市から委託を受けて
共同企業体
生活クラブ、NPOワーカーズ・コレクティブ協会、さがみ生活クラブ
の3者で運営しています

★綾瀬市から委託を受けている
就労支援事業「はたらっく・あやせ」
と連携しています

■ 就労準備支援事業「はたらっく・あやせ」

(取組概要)

綾瀬市では、働いた経験のない方、仕事を辞めて時間が経ってしまった方などへ、就職活動を始めるための支援として、就労への自信を高めるためのさまざまな体験型プログラムを提供している。まずは、「はたらっく・あやせ」に定期的に通い、生活習慣の見直しを目指す。生活力を身につけるための講座や演習への参加を通して、決まった時間に通うことに慣れながら、就労の前段階である実習に向けた準備を行う。実習先は綾瀬市を中心とした「はたらっく・あやせ」の活動を理解し、応援してくださる地域の事業所であり、実習後は就職活動に向けた模擬面接や履歴書の書き方、会社でのマナーなどを学び、市の就労支援員や「はたらっく・あやせ」のサポートを受けながら就職活動を行う。

■ 訪問型自立相談支援(アウトリーチ支援)

(取組概要)

ひきこもり状態や病気などによって社会的な孤立に苦しむ方に対し、訪問での相談を行い、社会参加や段階的な就労に向けたサポートを実施する。具体的には、福祉総務課へいただいた相談内容をアウトリーチ支援員と共有して、支援者の自宅へ訪問し、話を伺う。その後、信頼関係を構築しながら、関係機関への相談同行、就労支援といった、自立までの一貫した支援を提供する。

図表 支援プロセス



<大和市>

■ こもりびと支援事業

(取組概要)

様々な要因の結果として就学、就労、家庭外での交遊等の社会的参加を回避し、家庭等にとどまり続けている状態の方(こもりびと)とその家族を対象として、こもりびとコーディネーターが相談者に寄り添った支援を提供する。例えば、月に1回「こもりびとの居場所」として、こもりびと当事者が安心して参加できる場を保健福祉センターで提供する。また、当事者本人、ひいてはご家族の方が社会的に孤立しないよう、こもりびと当事者の社会参加への足掛かりとして、フリートークの場として「こもりびとの集い」を年に4回開催している。

さらに、大学教授、ジャーナリスト、体験者を講師として、こもりびとへの誤解や偏見のない地域社会を築いていくことを目的とした講演会を年に1回実施するほか、こもりびとやそのご家族が一步を踏み出す一助となるよう、「こもりびと支援ハンドブック」を作成し、漫画「こもりびと」をはじめとして、ご家族等に知ってほしいことや、こもりびとコーディネーターからの一言、こもりびと支援の段階的なイメージなどを掲載した手引きを作成している。

図表 こもりびと支援ハンドブック



<海老名市>

■ ひきこもり相談・支援事業

海老名市では、何らかの要因から社会的に孤立し、孤独を感じている状態にある人や、様々な生きづらさを抱えている状態にある方やご家族からの相談を受け、社会との邂逅に向けた支援や情報提供を行っている。

また、専任のアウトリーチ支援員を委託により設置し、アウトリーチを活用した専門的な立場からの見立てやアプローチにより、相談、家庭訪問や外出同行等、より当事者や家族目線に立った細やかでフレキシブルな相談・支援体制を構築している。

■ 居場所事業

ひきこもり相談・支援によって、家族や相談員とのコミュニケーションが取れた方が、一般的な社会に出る前の中間的・過渡的場所の提供を目的に、海老名駅至近の海老名市総合福祉会館を活用し、当事者向け居場所の提供を行っている。居場所では、各種アクティビティや自由に使えるスペースを用意。相談員の配置により相談対応も可能とし、当事者の方が安心して過ごせるよう配慮している。

また、参加者については居住の如何を問わず参加を可能としており、市域を問わないことで参加者の交流など幅広いつながりが生まれるよう工夫している。

ひきこもりなどの方への アウトリーチ(訪問)支援をします

誰にも言えない悩みを抱えていませんか。
アウトリーチ支援員があなたの状況に合わせて相談に伺います。自分らしく生きられるお手伝いをさせていただきます。

アウトリーチ支援とは
地域社会と接点がなく、外出が難しい、心身に不安を感じているなど、生きづらさを抱えていても相談に行くことができない方々のもとへ、ご自宅や話しやすい場所に訪問し、相談を受け、様々な社会資源に届けます。支援が届いていない人だけではなく、ご家族の相談も受け付けます。

おこまりごとの例



アウトリーチ支援事業委託先

相談支援事業所びーな'S

住 所 海老名市中新田383-1 わかば会館2階

電 話 046-292-1122

メー ル so-soudanbinas@soushu.jp

相談時間 月～土 9時～17時 ※年末年始を除く

参加者の声
気楽に過ごせた。
空気がゆったりしていた。
久しぶりに心から笑った。

参加費
無料

ようこそ えびなの居場所へ

ひきこもり状態から何かを変えたいと思っている...そんなあなたが自由に過ごすことが出来る場所があります。ぜひ一緒に過ごしませんか。
あなたが来ることをお待ちしております。

☆日 程☆	令和6年11月14日(木曜日) 令和7年2月13日(木曜日)
☆時 間☆	13時～16時
☆場 所☆	海老名市総合福祉会館 2階 第5会議室/茶室
☆内 容☆	自由に過ごせるフリースペース・折り紙・ コラージュ・トランプ・書籍など。 お茶を飲みながらゆっくり過ごせます。 相談も可能です。
☆対象者☆	市内在住者問わず、参加が可能です。 ひきこもり状態などで居場所を必要として いる方ならどなたでも参加できます。 【予約は不要です】

【お問合せ先】海老名市生活支援課 電話 046-235-9015(直通)

試行的事業

① アート事業(ワークショップ)

概要	各自治体の孤独・孤立に関する支援につながっている方を対象に、3組のアーティストによるWS(WS①キュンチョメ「みんなで貝を食べる 食べた貝で、目を閉じる」、WS②飯川雄大「0人もしくは、一人以上の観客に向けて」、WS③金川晋吾「写真と日記のワークショップ」を行った。
ねらい	- WS①自然の物(貝)や自然現象(貝が開く)、自然に対する想像(目を閉じる)を通じて、『自然とのコミュニケーション』を体感してもらう。 - WS②街中にささやかな「影響」を加えることから、環境を含む他者と関係することの楽しさ(「関わることは悪いことではない」ということ)を体感してもらう。
工夫点	各WSの目的を鑑み参加者像を明確にしたうえで、各自治体で支援員と相談しながら、参加者に声掛けを行った。
結果	WS①:参加者 23 名(うち相談者 17 名) WS②:1 日目 21 名(うち相談者 9 名)、2 日目 20 名(うち相談者 8 名) WS③:第 1 回 16 名(うち相談者 6 名)、第 2～3 回 11 名(うち相談者 5 名)

(WS①キュンチョメ「みんなで貝を食べる 食べた貝で、目を閉じる」)

- 日時:令和6年 12 月 26 日 14:00-16:00
- 会場:綾瀬市保健福祉プラザ調理室
- 概要:参加者とともに貝を調理し、食べ、貝殻に水平線を描き、貝を目の上に乗せ、目を閉じ深呼吸を行った。「貝が開く」様子から、「心を開く」楽しさや心地よさを無意識で体感してもらうことができた。水平線が描かれた貝殻は、座間市役所の展覧会場にも展示された。
- 支援者からの感想:「参加者の一歩引いた緊張感から、貝の焼ける匂いに惹かれた時の、獲物をしとめた時の集中力のある視線など、普段は見えない光景が見えた。さらに、こうした活動の中で、協力思考で動ける人だけではなく、協力を避ける人の動きも垣間見えた。」

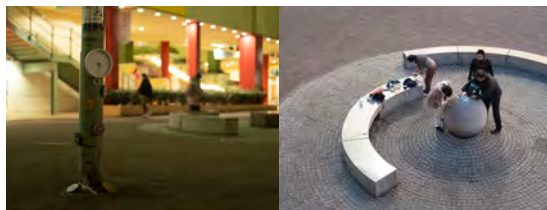
図表 当日の様子



(WS①飯川雄大「0 人もしくは、1 人以上の観客に向けて」)

- 日時:令和7年 2 月 18 日、19 日 13:00-16:00
- 会場:ビナ SUN ホール(神奈川県海老名市中央 1-4-1 ビナウォーク 3 番館)
- 概要:参加者は「バレそうでバレない、でも気がついたら目が離せなくなるようなイタズラ」をテーマに、参加者が設置場所や材料、作り方から自由に発想し作品を作り、ビナウォークと海老名中央公園に仕掛ける。仕掛けた作品を展示物としてマップを作成し、来場者に気づいてもらう。
- 支援者からの感想:「すぐに作業に取り掛かる方、熟考する方と様々で無事終了するのかと 1 日目は心配していたが、2 日目は参加者・支援者の粋を感じることなく一つの空間で作品を作っている一体感が生まれていた。普段は見えない気持ちや感覚が表現され本人たちの新たな一面が見えた。」

図表 当日の様子



(WS③金川晋吾「写真と日記のワークショップ」)

- 日時(全3回):
 - ✓ 令和6年12月17日 14:00-17:00
 - ✓ 令和7年1月8日 14:00-17:00
 - ✓ 令和7年1月27日 14:00-17:00
- 会場:綾瀬市保健福祉プラザ
- 概要:参加者に継続して日記を書いてもらう試みや、写真撮影を行った。写真家や支援者を被写体に、相談者が撮影した写真や、日記などが座間市役所の展覧会場で展示された。
- 支援者からの感想:「参加者が立場関係なく日記を共有することで、WSの回数が進むにつれて写真を撮る距離感が変わる人や、変わらない人などそれぞれに変化があり、一人ひとりの人との距離の取り方などが作品に表れていた。」

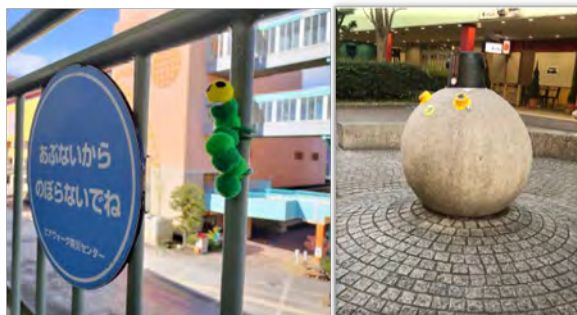
図表 当日の様子



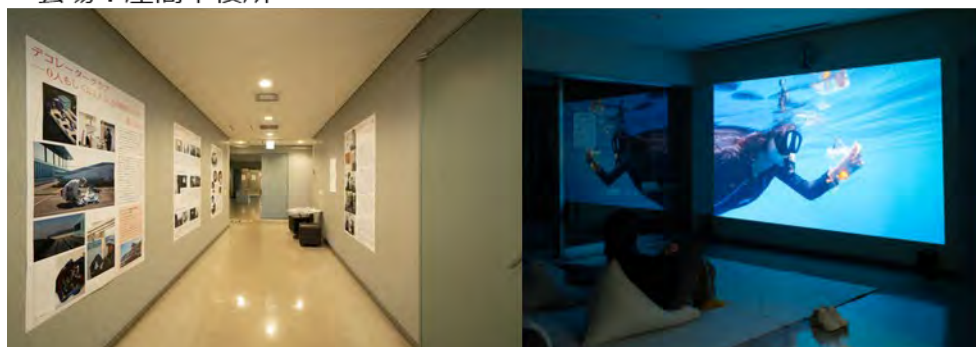
① アート事業(展示)	
概要	海老名市、座間市の2か所で展示を行った。海老名市では、海老名中央公園・ビナウォークにて、WS参加者の作品を展示した。座間市では、市役所にて、WSから生まれた参加者の表現やその記録を中心に展示を行い、展示期間中の週末にはギャラリーツアーやトークイベントを行った。
ねらい	海老名市では、孤独・孤立という社会課題を一般大衆に広く啓蒙することを目的として、街中展示(市公共施設と隣接する民間商業施設)を行った。座間市では、市役所という市民生活を意識する場所で、孤独・孤立の問題を個人として考える機会をつくるための美術展を開催した。
結果	来場者合計:3,198名(海老名会場:2,345名/1日平均293名、座間会場:853名/1日平均85.3名)
工夫点	トークイベントにて、出展作家とキュレーター、主催市の企画担当が、企画の背景やプロセス、支援とアートが交わる可能性について紹介することで、一見関わりのないように見える支援とアートの関係性について来場者にも理解を促した。
結果	来場者合計:3,198名(海老名会場:2,345名/1日平均293名、座間会場:853名/1日平均85.3名)

(展示の様子)

・海老名会場
会期：2025年2月21日（金）
～28日（金）9:00-17:00
会場：海老名中央公園
・ビナウォーク



・座間会場
会期：2025年2月21日（金）
～3月2日（日）9:00-17:00
会場：座間市役所



(アンケート結果(自由記述抜粋))

(海老名会場)

- 会場では地図パンフレットを持って、展示を探している方に何人もすれ違った。特にお互い言葉をかわしたり、交流があったわけではないが、同好の士という感じを持ち、孤独・孤立対策の文脈に「びったり」はまっていた。
- 目が離せなくなるようなイタズラで、楽しさと日常に紛れている小さな違和感におもしろさを感じた。

(座間会場)

- 展示から、生きているだけで他者に影響を与えている可能性が十分にあることや、人を頼ることについての謙虚さとポジティブさを感じた。
- 市役所という、ふだん事務的なことでしか訪れないような場所にいながら、時間も距離も超えたどこかに意識を飛ばせるはじめての体験だった。
- 「寄り添う」という言葉と現実のギャップの難しさ、立場の取り方など、戸惑うことばかりだけど時間や力をかけて変わっていくことはあるんだなと思った。アートの力で越境できたところが大いにあったと思う。みなさんの葛藤に触れて、励まされるわけでもなく、自分の孤独孤立や、つながることのむずかしさ、つながりの大切さを認識できた。
- 昨今溢れる地域おこしのための芸術祭とは異なり、座間市に存在した特徴的な福祉の存在から始まり、地続きの流れから職員の方を通して美術につながるものの価値が、とてつもなく貴重で、美術の世界にとって大事な要素だと感じている。

① アート事業(シンポジウム)	
概要	行政、福祉、アート各領域における孤独・孤立という課題への知見を共有し、市民参加につなげることを目的としたシンポジウムを開催した。
ねらい	行政、福祉、アート各領域における孤独・孤立という課題への知見を共有し、連携に向けて議論すること。
工夫点	- 第1部で孤独・孤立とアートの力をテーマに議論し、第2部で広域/多職種連携の必要性について議論した。 - 会場とのインタラクションを挟むことで、参加者の孤独・孤立という社会課題への普及・啓発を行った。
結果	参加者 126 名 「孤独・孤立支援にアートにできることがあると感じましたか」の設問に、9 割程度が「すごく感じた」「感じた」と回答。

(シンポジウム「孤独・孤立にアートができること」概要)

- 日時: 2月21日(金) 第一部: 13:00-14:30、第二部: 15:00-17:00
開場 12:30、入場自由(先着順)、UDトークによる文字支援あり
- 会場: 大和市保健福祉センター(大和市鶴間 1-31-7)
- プログラム:

◆第一部「孤独・孤立とアートの力」

●登壇者:

大西 連(内閣府孤独・孤立対策推進室参与、認定 NPO 法人自立生活サポートセンター・もやい理事長)、鈴木康広(現代美術作家、令和5年度同プロジェクト参加アーティスト)、西原 珉(秋田市文化創造館長、東京藝術大学美術学部准教授、心理療法士)

◆第二部「孤独・孤立支援における広域／多職種連携の必要性」

●登壇者:

奥田知志(NPO法人抱樸理事長)、田中みゆき(キュレーター、プロデューサー)、室井舞花(一般社団法人ひきこもりUX会議理事)

●ファシリテーター: 大西 連

(アンケート結果)

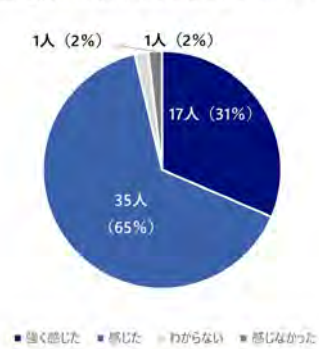
- 「孤独・孤立支援にアートにできることがあると感じましたか」の設問に、9 割程度が「すごく感じた」「感じた」と回答。
- 「孤独・孤立支援に多職種連携が必要であると感じましたか」の設問に 9 割以上が「強く感じた」「感じた」と回答。

図表 シンポジウム参加者へのアンケート集計結果

第一部の講演会で、孤独・孤立支援にアートに
できることがあると感じましたか？ (N=49)



第二部の講演会で、孤立・孤独支援に
多職種連携が必要であると感じましたか？ (N=54)



図表 当日の様子



② リソース調査・地域資源マップの作成	
概要	大和、海老名、座間、綾瀬の4市における孤独・孤立を支援する団体の存在と活動状況を把握し、4市で共有できる地域資源マップを作成する。 4市内で活動するNPO法人、社会福祉法人、こども食堂、地域包括支援センター等157件(メール・郵送・手渡し・FAX等)に配布、63件回収。
ねらい	市民から相談があった際、市域を超えて適切な居場所や支援団体へのつながりを行うべく、広域内で活動する団体の活動内容やPFにおける連携可能性について明らかにすること。
工夫点	- 各市から回答対象者を募集すると共に、調査実施会社の自主調査によって回答対象者を選出し、幅広い活動内容の団体を集めることができた。 - 調査結果を支援に活かせるよう、Google マップのマイマップを用いて、地域資源マップを作成した。
結果	内容別に見ると、「家庭」に関する活動を行っている団体、形態別にみると、「就労支援」を行っている団体が多かった。 調査対象団体をプロットした地域資源マップを作成した。

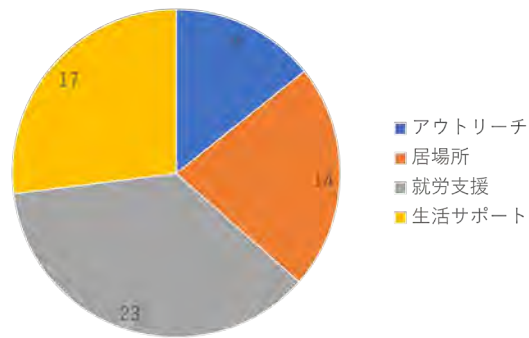
(集計結果)

- 回答者の活動内容をカテゴリ別に集計し、サンバースト図を作成したところ、ひとり親、子育て、虐待、DV、ひきこもり、身寄りがいない人、ヤングケアラー等の「家庭」に関する活動を行っている団体が最も多いことがわかった。
- 活動形態としては、就労支援が最も多く、次いで生活サポート、居場所づくりという結果であった。

図表 回答者の活動内容分布(サンバースト図)



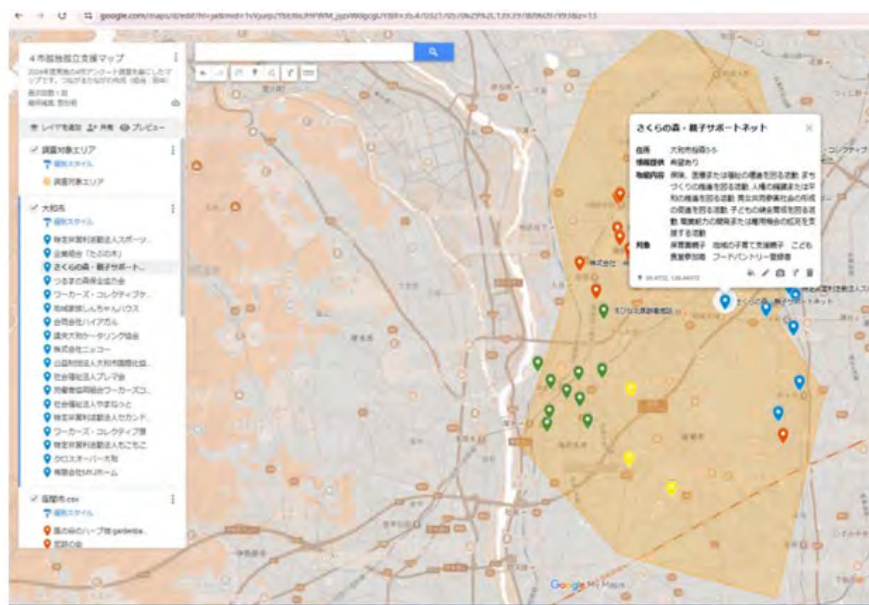
図表 回答者の活動形態(N=63、単位:団体)



(地域資源マップの作成)

Google マップのマイマップを用いて、調査対象団体の位置関係と活動概要を可視化することで、今後の支援に活用しやすいアウトプットを心掛けた。

図表 地域資源マップ



2-6. 呉市

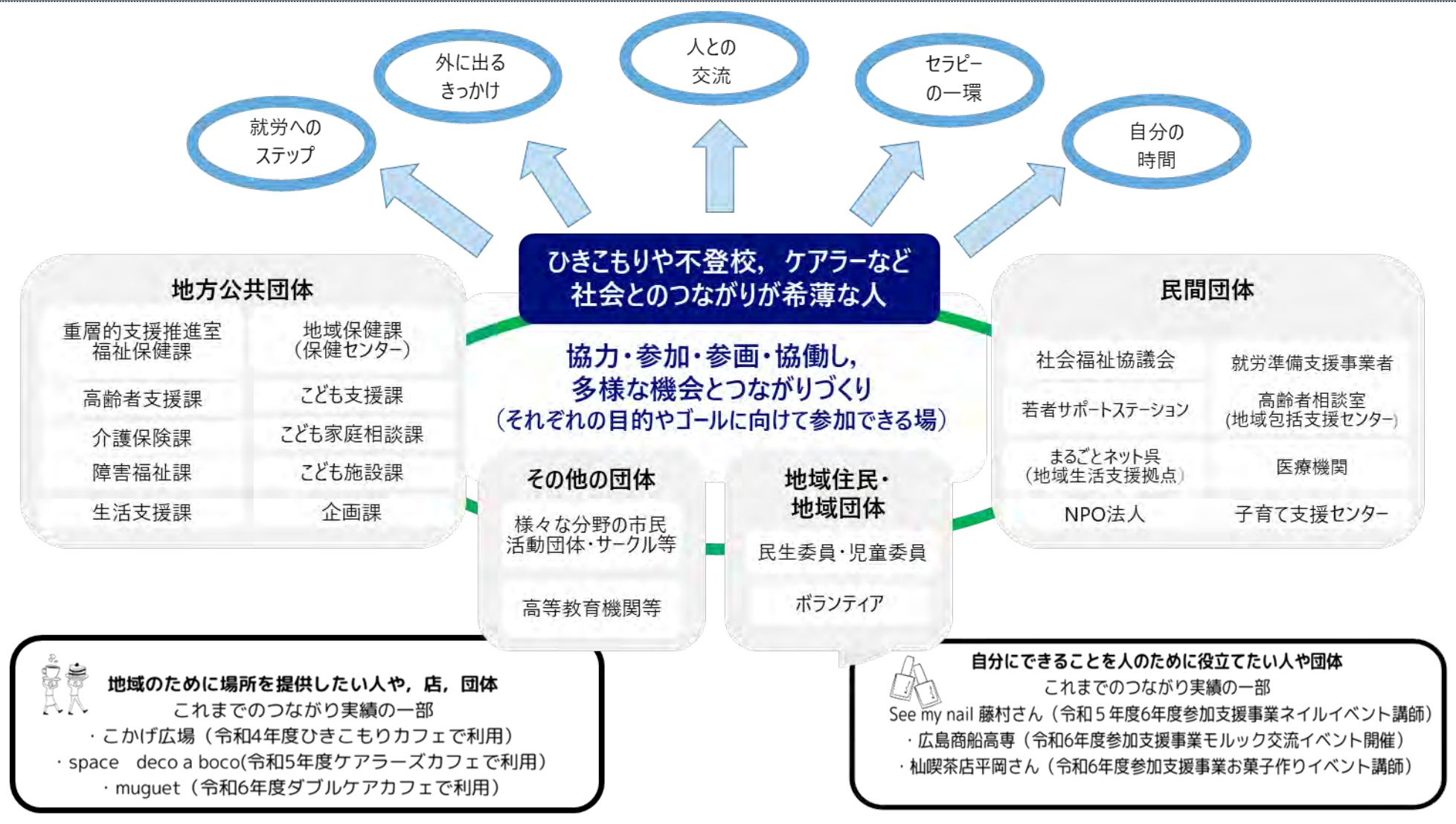
No.	6	呉市
-----	---	----

1. 取組の全体像					
1. 自治体の概要					
①	自治体名	呉市		②	担当部局名 福祉保健課 重層的支援推進室
③	人口	203, 549(人)＜令和 6 年 3 月31日時点＞			
④	自治体内 連携	庁内連携部局(メイン)		重層的支援推進室(福祉保健課)	
			庁内連携内 ※会議体、情報共有	・庁内関係部署との横断的な連携体制の構築 庁外関係機関との連絡調整	
		庁内連携部局(メンバー)		高齢者支援課・介護保険課・障害福祉課・生活支援課・地域保健課(保健センター)・こども支援課 こども家庭相談課・こども施設課・企画課	
			庁内連携内容 ※会議体、情報共有	・必要に応じて、事業内容の展開を検討 関係機関との連絡調整	
2. 形成をめざす地方版連携 PF の姿					
①	従前の 取組 ※重層の取組、外部組織連携、地域コミュニティ形成等	・ 令和 4 年度から重層的支援推進室を設置し、重層的支援体制整備事業として、属性を問わない相談支援, 参加支援, 地域づくりを実施。その中で、世代・分野を超えて各事業で協働できそうなこと、また、共通の課題等について、庁内福祉関係各課と呉市社会福祉協議会で、ワーキングを行った。			
②	実現したい 状態 ※構築する仕組み/支援対象の住民を取り巻く環境	今年度のゴール		・ PF メンバーがお互いの取組や事業を把握し、現在感じている課題を共有する。 ・ 福祉分野だけでなく、福祉以外の機関とも連携できる体制を整える。	
		最終的なゴール		・ PF が孤独・孤立対策の継続的な協議の場として機能する。 ・ 支援機関同士の関係性が深化し、連携の強化が図られ、支援の幅が広がり、新たな支援策を創出する。	

3. 地方版連携 PF における連携体制			
⑤	地方版連携 PF (種類があれば)	立ち上げ年度	令和7年度(予定)
		参画メンバー	行政, 社協, NPO 法人, 精神科・心療内科クリニック(医療機関), 市民活動団体, 高等教育機関等
		選出・打診時の工夫	目指している取組に連携不可欠な団体
⑥	地域協議会 ※特に専門性の高い支援を行う団体等で構成	立ち上げ年度	令和7年度(予定)
		参画メンバー	—
		選出・打診時の工夫	—
4. PF 連携による価値や工夫_考え方			
・ 社会とのつながりが希薄な方(生きづらさを抱えている方)とつながっている団体等と連携することで, 社会とつながるための支援策(社会資源の創出, マッチングなど)の幅が広がり, また, 支援につながる可能性も高くなる。 ・ PF を形成することで, 現在困難さを抱えている方だけでなく, 全ての方を対象として, 孤独を予防するという観点での取組も推進できる。			

2. 連携 PF イメージ

5. 連携PFのイメージ図



3. 試行的事業一覧					
6. 本年度に取り組む試行的事業の概要					
試行的事業のポイント・工夫		・ 実態調査を行い、その調査結果にもとづいて今後目指すべき孤独・孤立対策の方向性や支援メニューの組み立てを行う。 ・ 市民に対する普及啓発を図りながら、当事者に寄り添う各種イベントを設計する。			
	事業名称	事業内容	目的/期待効果・KPI	実施時期	発注先
⑤	実態調査	【調査対象及び調査対象者数】 ・ 満 18 歳以上の個人 3,000 名 【調査実施期間】 ・ 令和 6 年 9 月 27 日(金)～令和 6 年 10 月 31 日(木) 【調査事項】 孤独に関する事項、孤立に関する事項、居場所に関する事項、属性事項 【調査方法】 ・ 郵送により調査票を送付、郵送またはインターネット回答による回収 【回収率】 ・ 有効回答 1,198 件（有効回答率:39.9%）	・ 性年代毎の特徴を把握 ・ 市民が求める居場所のイメージについて把握	10 月～11 月	株式会社 ウェルウェル(約 190 万円)
			成果検証結果 ✓ 呉市では、若者と比較して中高年の孤独感が強く表れている。 ✓ 安心できる居場所が「ない」と回答した人ほど、孤独感を感じやすく、また孤立する傾向も高い。		
⑥	講演会	・ 孤独・孤立問題の市民への普及啓発・支援の機運醸成を目的として、絵本の朗読、パネルディスカッションで構成する講演会を開催した。 ・ パネルディスカッションには、内閣府大西参与、臨床心理士、地域のコミュニティ形成に関する実践者、地元の大学生が登壇した。	・ 市民に孤独・孤立という社会課題に関心をもってもらうこと	10 月 20 日(日)	講師謝金、手話通訳・司会など(約 30 万円)
			成果検証結果 ✓ 参加者 100 名 ✓ 講演会の満足度として、「大変良い」「良い」を選んだ人が 85%以上。 ✓ 講演会に参加する前後で「人と人とのつながりへの意識が「変わった」と答えた人が 60%以上。		
⑦	パネル展	・ 市民や支援機関に対して、「孤独・孤立」は誰でも起こりえる問題であることの周知を図り、孤独・孤立に悩む人が状況に応じ、相談や支援を受けることができる「相互に支えあい、人と人との「つながり」が生まれる社会」の実現を目指すべく、ケアラーやひきこもりの家族、LGBTQ の方に孤独を感じた体験や「つながること」についてインタビューし、それをまとめたエッセイを展示するパネル展を市内各所で開催した。	・ 市民に孤独・孤立という社会課題に関心をもってもらうこと ・ 当事者の方に、孤独・孤立を抱えているのは「自分だけではない」と感じてもらうこと	10 月～11 月	パネル展示作成(約 10 万円)
			成果検証結果 ✓ パネル展の満足度として、「大変良い」「良い」を選んだ人が 90%以上。 ✓ パネル展に来場した前後で「人と人とのつながり」への意識が「変わった」と答えた人が 60%以上。		

7. 次年度以降に向けた事業等の案 ※PDCA サイクルに照らして次年度以降に取り組んでいく事業イメージ(あれば)を列举

- ・ 重層的支援体制整備事業の地域づくり, 参加支援事業を利用して, PFの活性化を図り, PFに参加する機関・団体の増加を図る。

8. 孤独・孤立対策を公表した際の反響

- ・ 「孤独・孤立」という社会課題解決の重要性は認識されつつあるものの、庁内関係部署含め、支援機関等の積極的な関与までは至らなかった。

4. 連携 PF の行程および実務上の留意点

【PF 立ち上げまでの行程】 ※令和6年度から孤独・孤立対策を実施

R6 年度	(ア)初期段階	
4月 ～	主担当部署の 設定	■ひきこもりやヤングケアラーの調査経験がある重層的支援室が担当
4月 ～	担当者の初動	■地域特性が読めない地域には、参加者を運営側が指定しない自由参加型での PF の形も検討
	(イ)準備段階	
4月 ～	連携 PF の 企画・設計	■既存事業や過去の経験をベースに対象者像を描いて PF の設計を行った
10月 ～	地域の現状把握	■孤独・孤立についての調査や、試行的事業のテーマに関わる実態調査行う
10月 ～	関係団体の リストアップ(庁内)	■庁内関係部署に「孤独・孤立」という社会課題やその取組内容について周知することを心掛けた
10月 ～	関係団体の リストアップ(庁外)	■既存の連携団体へのコンタクトや関係部署からの紹介を基にしたつながりづくりからスタートした
11月 ～12 月	取組テーマ決定	■試行的事業のメニューを先に決め、後から PF のテーマを議論するという順序で行った
	(ウ)設立段階	
10月 ～	域内住民・団体への 情報発信	■地域住民の経験談や当事者の声をベースに普及・啓発活動を実施した
今後	連携 PF の 運営	■2層構成の PF を運営しながら、支援団体同士のつながりを促進する
	(エ)自走段階	
今後	地域協議会の 設置	■PF メンバー、庁内関係部署との関係を整理しながら検討を進める
今後	PF の 拡大・活性化	■スポーツ、教育など福祉以外のテーマを取り入れた PF 構築・拡大を目指す

【それぞれの段階での留意】

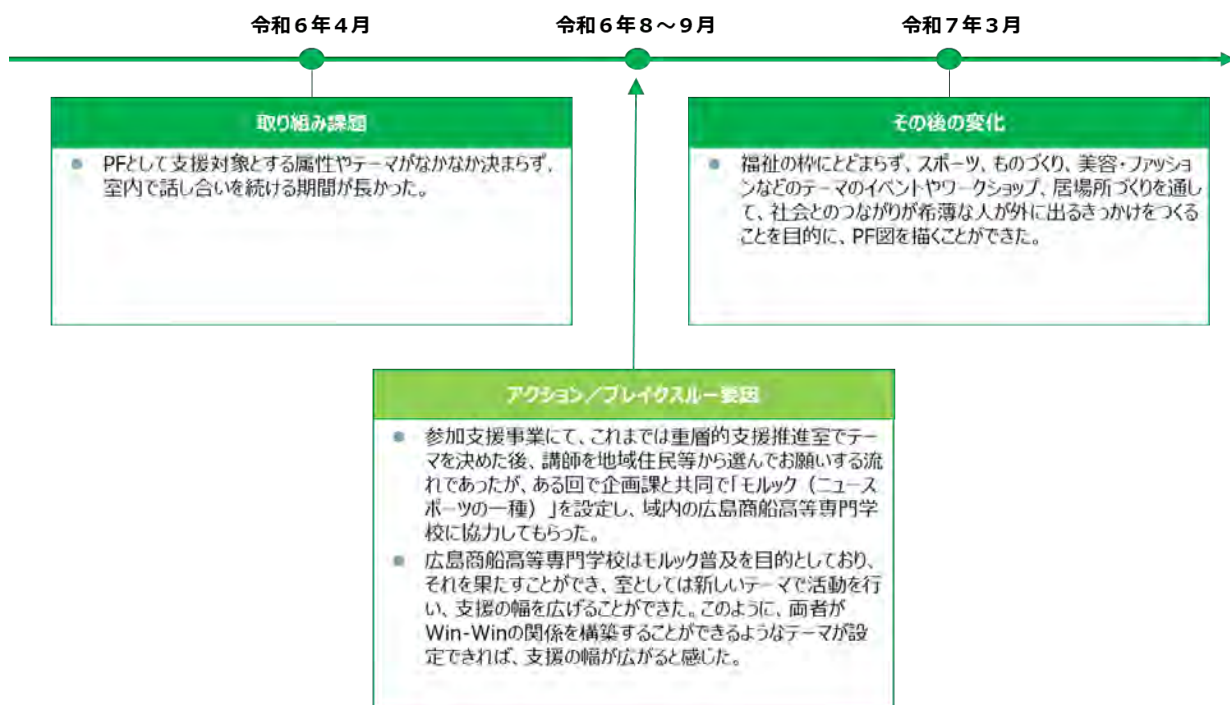
(ア)初期段階		
①	主担当部署の設定	■ひきこもりやヤングケアラーの調査経験がある重層的支援推進室が担当 - 令和4年度にひきこもり調査や令和5年度にケアラー実態把握調査を設計した、重層的支援推進室が主担当。 - 両調査の共通点として「孤独・孤立」を社会課題として抱えていることを実感し、申請に至った。
②	担当者の初動	■事前準備をしていたこともあり、実態調査やイベントの企画について、採択後早い段階から動き出すことができた - 本事業の採択結果に関わらず、実態調査は行う予定であったため、仕様書なども作成済みであった。講演会についても予め計画していたため、迅速に試行的事業の履行に移ることができた。 - 上記以外の試行的事業として、採択後に室内で協議の上、パネル展の開催を決めた。

(イ)準備段階		
③	地域の現状把握	■孤独・孤立についての調査や、試行的事業のテーマに関わる実態調査を行う 実態調査を企画・実施。サンプルの数を多くして、孤独を感じている人のN数を十分にとった上で分析したく、3,000名への実施決定。前々から準備していたため、初動が早く、10月中に実施することができた。呉市独自設問として、「居場所」に関する設問を設計。
④-1	取組テーマ決定	■試行的事業のメニューを先に決め、後からPFのテーマを議論するという順序で行った - 孤独・孤立自体が新しく取り組むテーマであるため、まずは実態としてのデータを把握し、その上で政策を考えたく、実態調査を行うことは最初に決まった。 - 過去にケアラーの支援講演会を行った経験から、今年度も講演会は実施したいという想いがあった。
④-2	連携PFの企画・設計	■既存事業や過去の経験をベースに対象者像を描いてPFの設計を行った - 対象者やテーマについて、庁内部署との調整も試みたが、孤独・孤立PFの出口を何にするか(例:就労支援など)が難しく、時間をかけて協議した。 - 結果、参加支援事業をベースに、ひきこもりやケアラーの支援の経験から、「社会とのつながりが希薄な人」を対象とする方向性で合意形成ができた。
⑤	関係団体のリストアップ 初期メンバーへの声掛け	■庁内関係部署に「孤独・孤立」という社会課題やその取組内容について周知することを心掛けた 本事業における呉市の取組について、内部会議や代表者会議にて発表して、普及啓発を図り、連携可能性を模索した。
		■既存の連携団体へのコンタクトや関係部署からの紹介を基にしたつながりづくりからスタートした - 既に連携している団体が多いため、リストアップ自体は難しくなく、協力してもらえそうな感触もあった。連携については、各団体が負担感を感じない説明の仕方が重要だと考えた。 - 関連部署にも有望な団体を紹介いただき、アプローチを実施した。

(ウ)設立段階		
⑥	域内住民・団体への情報発信	■地域住民の経験談や当事者の声をベースに普及・啓発活動を実施した - 講演会では、地域で孤独・孤立に関連があり、かつ集客が期待できる有識者を登壇者として招聘した。 - 当事者の声を広く届けるべく、ケアラーやひきこもりの家族、LGBTQの方にインタビューし、それをまとめたエッセイを展示するパネル展を企画した。
⑦	連携PFの運営	■2層構成のPFを運営しながら、支援団体同士のつながりを促進する - 核となる団体と、ゆるく連携する団体の2層構成を予定している。 - 利用者が固定されている、支援メニューが限定されている、という支援団体同士の課題を、支援団体同士が連携することで解決するようなPFをしたい。

(工)自走段階		
⑧	地域協議会の設置	■PF メンバー、庁内関係部署との関係を整理しながら検討を進める PF を構築した上で、活動の核となる団体で地域協議会を構成したいと考えている。
⑨	PF の拡大・活性化	■スポーツ、教育など福祉以外のテーマを取り入れた PF 構築・拡大を目指す - 広報活動にも注力して拡大していきたい。具体的には、スポーツ関連の団体、教育機関などとの参加支援事業での連携を実績として、福祉以外をテーマとして活動する団体も加入したくなるような PF にしていきたい。 - 将来的には、個人で活動しているような方も含めたい。

ブレイクスルー要因		
	アクション/ ブレイクスルー要因	■参加支援事業を他部署と連携しながら、個人ではなく団体とイベント等を企画したこと - PF の支援対象やテーマについて、室内の意見を集約することに時間を要したが、参加支援事業にて、域内の商船高等専門学校とスポーツに取り組んだことで、テーマ設定における思考の幅が広がった。 - これまでは重層的支援推進室でテーマを決めた後、講師を地域住民等から選んでお願いする流れであったが、今回はじめて域内の団体と一緒にイベントを企画したことによって、協力を仰ぐだけでなくお互いにメリットを享受しながら活動するという官民連携のモデルを検証することができた。 - このように、両者が Win-Win の関係を構築することができるようなテーマが設定できれば、支援の幅が広がると感じ、それ以降福祉の枠に留まらないテーマの参加支援事業の企画や PF 構築を検討し始めた。



コラム ～地域の支援団体から見た孤独・孤立対策と連携 PF の重要性～

ダブルケアひろしま

- ・ ご自身のダブルケアの経験を通じ、ダブルケアの当事者は、その悩みや状況について気軽に話すことができる場所がないという問題意識から、令和3年12月に「ダブルケアひろしま」を立ち上げる。月に1回程度、ダブルケアカフェを市内で開催し、ダブルケアラーの居場所づくりを行っている。また、令和6年から年に1回の頻度で呉市重層的支援推進室と共に、ダブルケアパネル展を開催している。
- ・ ダブルケアカフェの参加者は40～50代の女性が多く、毎回6～7人程度集まって、2時間～2時間半程度、自分たちの話をしあう。「行政に相談することはハードルが高いが、カフェであれば参加しやすい」との声をいただいている。相談内容によっては、重層的支援推進室、地域包括支援センターや支援機関につなげることもある。
- ・ 現在、市内の貸しスペースを活用してダブルケアカフェを開催しているが、ゆくゆくは常設の場所でのダブルケアカフェの開催や、女性の参加者のみならず「男性介護」をテーマとした集まりの企画も検討したい。

💡 個人情報保護の観点や新型コロナウイルス流行の影響から、地域での関係性が希薄化する中で「障害者には相談支援専門員、高齢者にはケアマネジャーがつくが、ケアラー自身の話を聞く人がいない」ことに気づき、ケアラーの居場所づくりを実施

- ・ 呉市内でも、「近所の人顔がわからない」という地域住民が多く、自治会や子ども会も昔のように機能していない。個人情報保護の観点から、独居高齢者やひきこもりの方、ケアラーについても、その所在が知られにくいことが課題だと認識している。ケアする側が倒れるとその家庭は崩壊に向かうため、その一歩手前の時点で、ケアラーが考えや悩みをさらけ出す場所が必要だった。

💡 PFへの期待は、「福祉」を押し出さず、支援団体同士、地域住民同士のフラットな関係性の構築

- ・ 「福祉」というカテゴリに棲み分けられると、別物扱いされているような感覚に陥る。孤独・孤立官民連携PFでは、参画する支援団体同士がフラットな状態でそれぞれの活動を共有できることが理想である。

ダブルケアパネル展の様子



ケアのある暮らしについてもっと「知る」ことで、お互いに不安や負担を軽減できると思います。

ケアラー自身が感じている負担感は抱え込みがちで、外とつながりにくい。

「相談」と構えず気軽に何でも話せる場、ケアの話題を共有できる場を、行政やさまざまな団体とつながりながら充実させていきたいです。ケアがあっても大丈夫！といえる地域社会になるための活動を続けます。

ダブルケアひろしま 代表
大谷 佳代様

5.自治体等との打合せ記録一覧				
No.	日時	打合せ相手団体	出席者	
			打合せ相手	NRI
1	7/31(水) 10:30-12:00	呉市 福祉保健課 重層的支援推進室	重層的支援推進室 社会福祉協議会	生駒、谷本、坂田
2	8/27(火) 15:00-16:30	呉市 福祉保健課 重層的支援推進室	重層的支援推進室 社会福祉協議会	生駒、坂田
3	9/27(金) 12:00-13:00	呉市 福祉保健課 重層的支援推進室	重層的支援推進室 社会福祉協議会	生駒、坂田
4	10/10(木) 13:30-14:30	呉市 福祉保健課 重層的支援推進室	重層的支援推進室 社会福祉協議会	坂田
5	1/14(火) 15:00-16:30	呉市 福祉保健課 重層的支援推進室	重層的支援推進室 社会福祉協議会	坂田
6	3/11(火) 13:00-14:00	呉市 福祉保健課 重層的支援推進室	重層的支援推進室 社会福祉協議会	生駒、坂田

6. 自治体による従前からの取組

令和 4 年度から重層的支援推進室を設置し、重層的支援体制整備事業として、属性を問わない相談支援、参加支援、地域づくりを実施。その中で、世代・分野を超えて各事業で協働できそうなこと、また、共通の課題等について、庁内福祉関係各課と呉市社会福祉協議会で、ワーキングを行った。

■ ひきこもりに関するアンケート調査(令和 4 年度実施)

(取組概要)

呉市におけるひきこもり状態にある人の実態を調査し、地域における実態を把握するため、市内の民生・児童委員 619 人に調査票を配布し、527 人から回答を得た。

その結果、民生・児童委員は、ひきこもり状態にある人を、直接家族等に相談されて把握しているというよりも、地域活動等により把握しているということがわかった。また、「把握しても、本人や家族から関与を拒否される。」などの意見もあり、ひきこもりの本人、家族については、周囲に知られたくない、自己責任であり支援は求められないとの思いなどから、相談することに抵抗があり、社会的孤立が進んでいるのではないかと推測された。

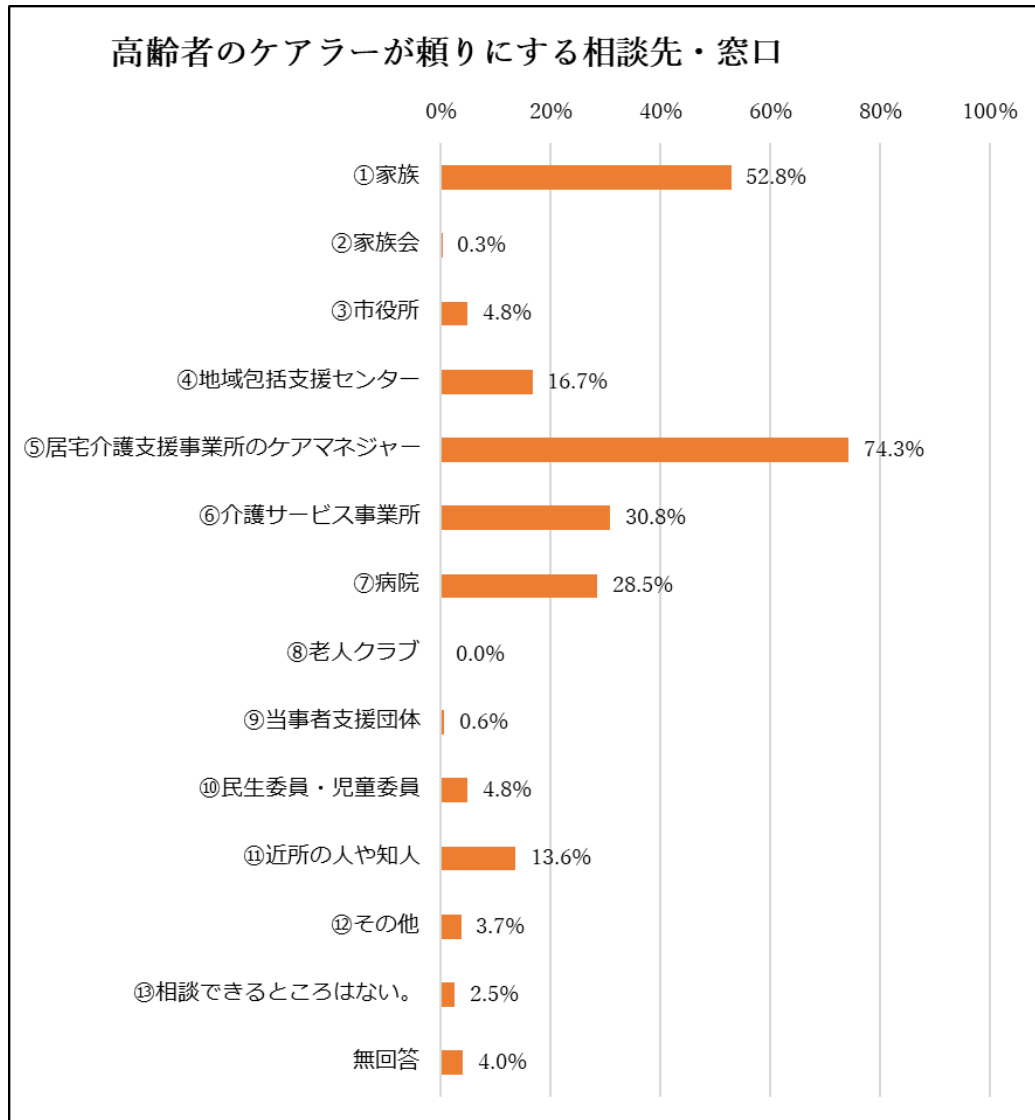
■ ケアラー実態把握調査(令和 5 年度実施)

(取組概要)

呉市でケアが必要な方とケアラーを支えるための取組を進める上で、ケアラーの生活実態や困っていることを把握するため、高齢者、障害児・者等の介護・お世話・支援を行っている呉市民約1500名に調査票を配布し、562件の回答を得た。

その結果、ケアラーは自分自身のことを「ケアラー(要介護者等と同等の支援の対象者としての家族介護者)」と認識することなく、日々のケアや日常に追われ、自分の人生の充実よりも、多岐にわたるケアに悩み、不安を抱えている現状が判明した。

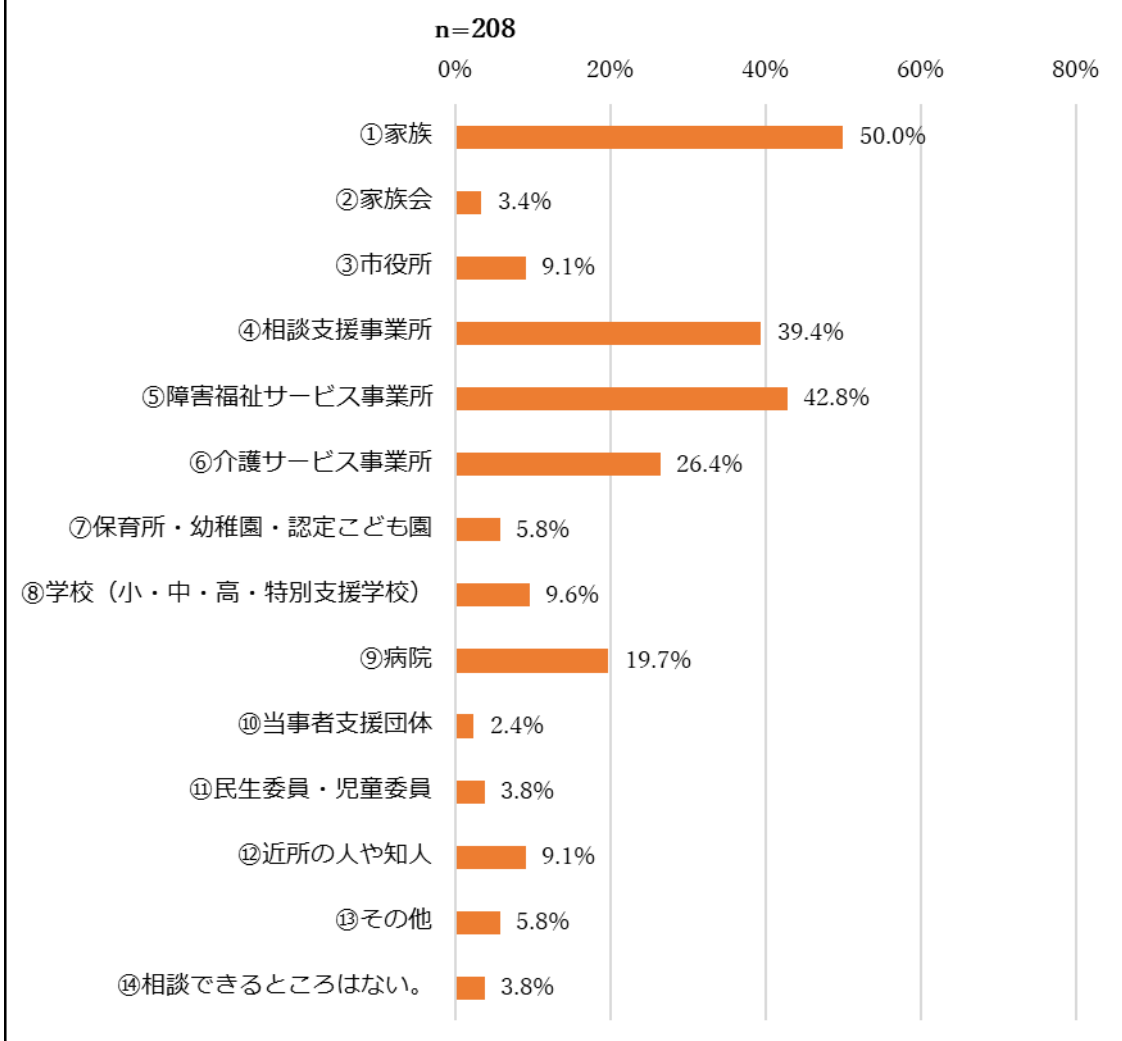
図表 ケアラーが頼りにする相談先・窓口



高齢者のケアラーが頼りにしている相談先・窓口は、「ケアマネジャー」(74.3%)が最も多く、次いで「家族」(52.8%)、「介護サービス事業所」(30.8%)、「病院」(28.5%)の順となり、介護と医療の専門機関が挙げられていた。

一方で、「相談できるところはない」は 2.5%となった。「その他」では、インターネットなどの回答があった。

障害児・者のケアラーが頼りにする相談先・窓口



ケアラーが頼りにしている相談先・窓口は、「家族」(50.0%)が最も多く、次いで「障害福祉サービス事業所」(42.8%),「相談支援事業所」(39.4%),「介護サービス事業所」(26.4%)の順となった。

一方で、「相談できるところはない」は 3.8%となった。

7. 試行的事業

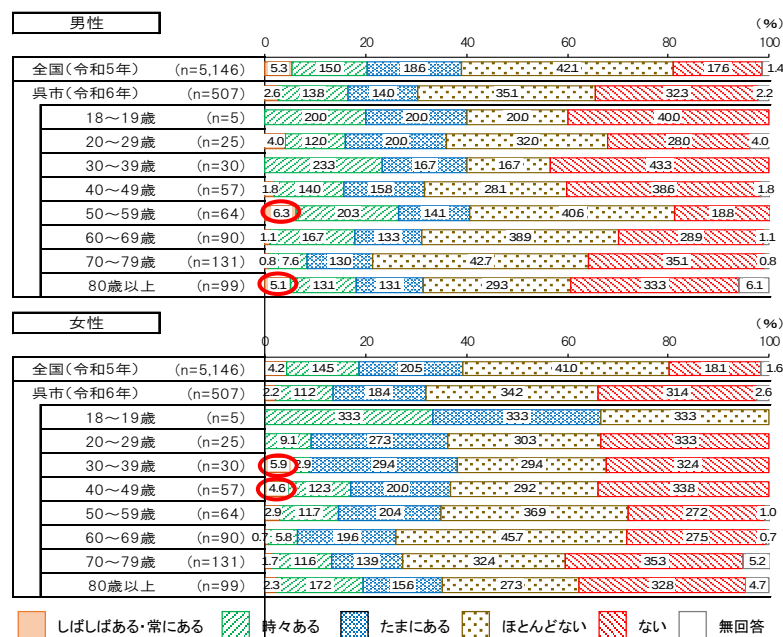
① 実態調査

概要	- 調査対象者:18 歳以上の市民から無作為抽出した 3,000 人 - 調査方法:郵送により調査票を送付, 郵送またはインターネット回答による回収 - 調査期間:令和 6 年 9 月 27 日(金)~令和 6 年 10 月 31 日(木) - 設問数:孤独や孤立に関する事項, 年齢, 性別等の属性事項等 28 問
ねらい	呉市における孤独・孤立の実態を把握し, これに関連する施策を実施している関係課において, 対策を検討する上での基礎資料を得ること
工夫点	- 回答者が郵送・インターネット双方の回収を選択できるようにし, 回収率アップを試みた。 - 呉市独自の設問として, 居場所に関する設問(「あなたの居場所はどこですか。」「どのような居場所があったらよいと考えますか。」等)を設計し, 孤独の感じ方等とのクロス分析を行った。
結果	- 有効回収数 1,198 件(有効回答率 39.9%) - 呉市では, 若者と比較して中高年の孤独感が高く表れている。 - 安心できる居場所が「ない」と回答した人ほど, 孤独感を感じやすく, また孤立する傾向も高い。

(年代別孤独・孤立の実態)

- 孤独感が「しばしばある・常にある」と回答した人の割合は, 男女・年齢階級別にみると, 男性では 50 歳代及び 80 歳以上, 女性では 30 歳代及び 40 歳代で高い。

図表 年齢階級別孤独感



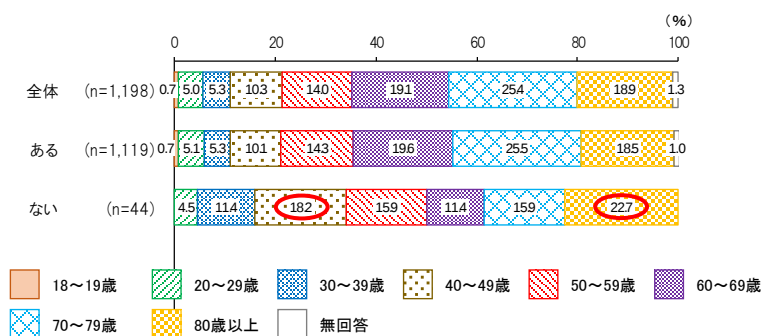
(呉市独自設問:安心できる居場所の有無別孤独感と孤立の傾向)

- 安心できる居場所が「ない」と回答した人は孤独感・孤立の傾向が高い傾向にある。
- 安心できる居場所が「ない」と回答した人の割合は, 40 歳代及び 80 歳以上において高い。

図表 安心できる居場所の有無別孤独感と孤立の傾向

設問	回答	n(人)	孤独感 「しばしばある・常にある」		孤立の傾向あり	
			度数 (人)	割合 (%)	度数 (人)	割合 (%)
あなたにとって、安心できる居場所がありますか。	ある	1,119	19	1.7	30	2.7
	ない	44	10	<u>22.7</u>	20	<u>45.5</u>

図表 安心できる居場所の有無別年齢階級



② 講演会	
概要	- 孤独・孤立問題の市民への普及啓発・支援の機運醸成を目的として、絵本の朗読、パネルディスカッションで構成する講演会を令和6年10月20日(日)に開催した。 - パネルディスカッションには、内閣府大西参与、臨床心理士、地域のコミュニティ形成に関する実践者、地元の大学生が登壇した。
ねらい	市民に孤独・孤立という社会課題に関心をもってもらうこと
工夫点	2部構成とし、第1部で絵本の読み聞かせを用いて人と人とのつながりについて課題提起することで、幅広い年代の関心を集めるよう工夫した。その上で第2部では、地域で活動する方に登壇を依頼し、自らの経験に基づいてお話いただくことで、来場者に孤独・孤立という社会課題を自分事として感じてもらえるよう設計した。
結果	- 参加者100名 - アンケート結果より、講演会の満足度として、「大変良い」「良い」を選んだ人が85%以上を占めた。講演会に参加する前後で「人と人とのつながりへの意識が「変わった」と答えた人が60%以上を占めた。

(広報の工夫)

- 市役所本庁舎及び各市民センター、子育て支援センター(2箇所)、社会福祉協議会各支所、児童館(3箇所)に、ポスターの掲示とチラシの配架を依頼した。
- アンケート結果より、「チラシ」で本イベントを知った方が最も多く4割を占めた。

図表 講演会 ポスター

令和6年度
孤独・孤立対策事業

つながる講演会

～つながりが明日のチカラになる～

孤独・孤立は人生の中で誰にでも起こりうるものです。
あなたの家族や周りの人も、もしかしたら、今、悩みを一人で抱えているかもしれません。
ひとりで不安を抱えている人に寄り添い、手を差し伸べられる社会を目指して、
人と、社会と「つながる」後押しとなることを願って、講演会を開催します。
ぜひご参加ください。

参加費無料／要事前申込み(300名)／手話通訳あり

光の絵本「ヒカリ」

日時 令和6年10月20日(日) 14時00分～15時30分
(開場)13時30分

場所 広まづくりセンター 3階ホール
(旧市広古新聞2丁目1番3号 広市民センター)
※公共交通機関をご利用ください。市民センター駐車場を
利用された場合、無料利用はできませんので、ご了承ください。

内容 第1部(14時05分～14時25分)：絵本から見える人と人とのつながり
『もどち』 谷川俊太郎・文／和田誠・絵 玉川大学出版部
第2部(14時25分～15時30分)：パネルディスカッション
『つながりが明日のチカラになる』

申込み 9月20日(金)～10月15日(火)17時までに
申し込みフォームからお申込みください。
当日、お席に余裕がある場合は、事前申し込みが
なくても、ご参加可能です。
(申込み外部リンク)
https://j35ab611.form.kintoneapp.com/public/0000080f9b48ee882ff2b

【お問い合わせ先】
社会福祉協議会重層的支援推進室
〒737-8501 呉市中央4丁目1番6号 呉市役所本庁舎2階
TEL:0823-25-5715 E-mail: zyusou@city.kure.lg.jp

登壇者紹介

第1部 14:05～14:25

岩竹 香織さん インタビュー・ライター
放送局、図書館、設計事務所勤務を経て「聞く」仕事へ。言葉を発してくれ
た相手の、言葉にならない心を感じながら日々対話を重ねている。

第2部 14:25～15:30

大西 連さん 内閣府参事官・孤独・孤立対策推進室長
認定NPO法人自立生活サポートセンター・もやい理事長。新宿ごはんプラス
共同代表。20代前半よりホームレス状態の方。生活困難された方への相談支
援に関わる。生活保護や社会保障制度などの問題について、現場からの声の
発信や政策提言を行うとともに、令和3年6月に内閣府孤独孤立対策推進
室政策参事に就任し、政府の孤独・孤立対策の政策立案に携わる。令和6年
4月から現職。

神崎 洸一さん 医療法人正徳会みどりクリニック院長
臨床心理士・公認心理師
NPO法人の代表。浅田病院勤務を経て、現在はみどりクリニックに勤務し、
児童発達支援センター・成人発達外来に携わる。特に発達障害や自閉、市販薬
依存など、子どもや若者の行動問題に対する支援に力を注ぐ。訳書に『自閉
スペクトラム障害とアスペルger-症候群の始まりから回復まで』(分館翻訳、
マッシュルーム・ティンズリー、サラ・ヘンドリックス著、明石書店、2022)が
ある。

佐々木 サラさん 経営者・カフェ「スキナダグ」店主
広島県立広島高等学校卒業。広島県立大学在学中に、まちづくりとプロジェク
トマネジメントについて学び、地域のコミュニティづくりに関して実践・研
究してきた。授業の一環でアメリカ・ボールドを結核たことで、よりま
ちづくりに興味を持ち、卒業後は、「地方創生」を理念に掲げる企業に就職。
会社員をする一方で「スキナダグ」というカフェを開業する。現在は、会社
を退職し、店舗経営に専念中。

古森 ふきさん 広島県立大学地域創生学部地域創生学科
地域政策コース4年
広島県立広島高等学校卒業。大学でマーケティングを学ぶことに所属し、高中
通商で学んだ魅力的な人やお店をSNS(YouTube担当)で発信し、商店
街の活性化に貢献。活動の様子は、RCCテレビ「イママ」で取り上げら
れた。授業の一環で、竹原市田原町の活性化をテーマに制作した動画ド
キュメンタリー映画は、第11回新島義典(第75回広島県展)映像部門
で奨励賞を受賞。

(アンケート結果(自由記述抜粋))

- 人と人とのつながり方は千差万別で、何ら無理強いや強制されるものではないが、地域や接する相手が何に価値を持ち、どういうつながりを求めているかをよく考えたり、気づいたりできたらいいと思う。
- つながりは選択自由。つながらないのも大事な選択なんだなぁと思いました。私は、どちらかという
と、つながって欲しいと思って、そういう場を作っていきたいと思っています。まずは、行動することだ
なと感じました。
- 人によってつながり方は違う。それを自分で選べる自分になりたい。人のことを気にする自分だけど、
自分にとって何がいいのか、心が落ち着くのか、自分を見つめる人でありたいと思った。また、仕事柄、
子育て支援の子ども、親にも、それぞれ選ぶ道ができるよう、営業で伝えられたらいい。

図表左 第1部「絵本からみえる人と人とのつながり」

図表右 第2部パネルディスカッション「つながりが明日のチカラになる」



③ パネル展	
概要	ケアラーやひきこもりの家族、LGBTQ の方に孤独を感じた体験や「つながること」についてインタビューし、それをまとめたエッセイを展示するパネル展を市内各所で令和6年10月下旬～11月下旬にかけて開催した。
ねらい	市民や支援機関に対して、「孤独・孤立」は誰でも起こりえる問題であることの周知を図り、孤独・孤立に悩む人が状況に応じ、相談や支援を受けることができる「相互に支えあい、人と人との「つながり」が生まれる社会」の実現を目指す。
工夫点	介護支援専門員連絡協議会にケアマネへの広報を依頼し、障害分野については、地域生活支援拠点会議にて広報を行った。その他、民生委員児童委員協議会会長会議にて広報し、地区の協議会にて広報及びチラシの配布を依頼した。また、孤独・孤立調査の際にチラシを同封する等、広報に力を入れた。
結果	アンケート結果より、パネル展の満足度として、「大変良い」「良い」を選んだ人が90%以上を占めた。パネル展に来場する前後で「人と人とのつながり」への意識が「変わった」と答えた人が60%以上を占めた。

(開催日時・場所)

以下の日程、場所で開催した。

- 10月17日(木)～10月22日(火) 広市民センター
- 10月23日(水)～10月29日(火) 安浦まちづくりセンター
- 10月30日(水)～11月5日(火) 昭和まちづくりセンター
- 11月21日(木)～11月24日(日) 市役所本庁

図表左 パネル展ポスター

図表右 パネル展の様子



(アンケート結果(自由記述抜粋))

- 人とつながる大切さを改めて感じました。1人でも多くの人が一じゃないと思える社会になってほしいです。
- 自分と夫とのこと, 息子のことで悩んでおり, 孤独を感じることもあり誰かに相談できたらなと思っていたところ, このパネル展に出会いました。
- 小さいことでも本人にとってはすごく大きな意味があるなと思った。気が付けるように周囲にアンテナを張って過ごしていこうと思います。
- 周りにつながるところがあることを知り, 助けてと言えるところ, 共感してもらえるところがあるのを知って力をもらい頑張れると思った。